埼玉大学紀要　教育学部，64(2)：85−119（2015）

沖縄県・石垣島の変遷と青年

―長期研修（2014・8・1〜2015・3・31）調査・研究報告―

坂　西　友　秀　　埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

キーワード　琉球王国、御嶽信仰、琉球処分、戦後の開拓移民、民族芸能、青年会

奄美、沖縄、先島諸島と琉球王国

石垣島の歴史は古く、原住民族は２万年前の旧石器時代から定住していたといわれる。石垣島白保竿根田原洞穴（石垣新空港敷地内）、宮古島ピンザアブ洞穴では、古い人骨が発見されている。南城市（サキタリ洞遺跡）では、9,000年以上前の人骨が発掘され、国内最古級の埋葬人骨の可能性が高いと報じられている（琉球新報，2014年12月12日）。珊瑚礁の多い八重山諸島は石灰岩からなり、地下水中の酸が珊瑚礁の主成分炭酸カルシウムと中和し、人骨（カルシウム）がよく保存されるという（石垣市八重山博物館，2010）。

二万年ほど前までは沖縄は中国大陸と陸続きで、狩猟をして琉球列島まで人がやってきたと考えられている（安里，2004）。いずれにしても、東アジアで最も古い時期から人々が生活してきた島々である。その後多くの人々の去来が繰り返された。10世紀前後に至って航海技術の進歩もあって、沖縄、八重山諸島の交易、産品の交換取引、人々の交流が盛んになった。生産力の増大は富の蓄積・集積と地域の有力者の台頭につながり、琉球王国の誕生に至る（沖縄県立博物館・美術館，2007）。

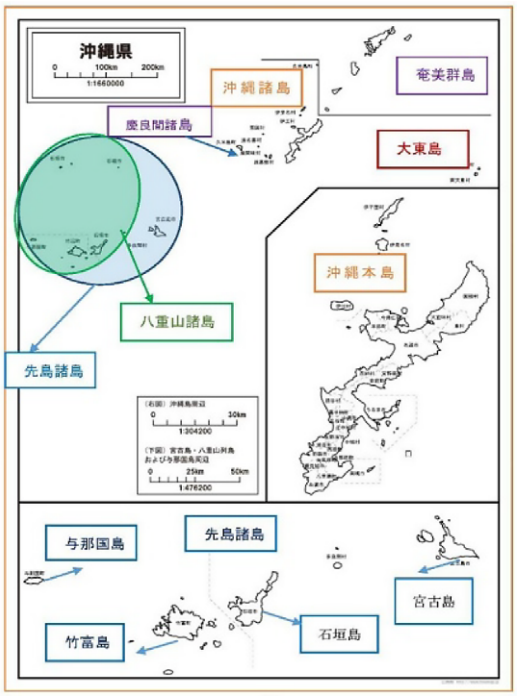

図１　沖縄・先島・八重山諸島

奄美、沖縄と宮古、八重山の島々は、文化的・経済的に異なる圏にあったという（安里，2004）。10世紀頃の中国は、宋（首都開封）・南宋（杭州）の時代で、生産力が高く、南方貿易が盛んに行われた。香辛料（胡椒･香など）や塩･煙草、陶磁器、貨幣などが日本にも入ってくるようになった。日本からは、琉球の硫黄（硫黄鳥島）、夜光貝（螺鈿などの材料）が輸出された。中国の商人も日本に来るようになり、交流の少なかった先島、沖縄、奄美の諸島、そして九州間で商品の交換が行われるようになった。九州の長崎で作られる「石鍋」や、徳之島で生産されるようになった「亀焼」が、商人の手を介して奄美、沖縄、先島諸島へ流通し、代わりに島々の夜光貝の産品が九州へ普及したと考えられている。今まで独立していた地域への石鍋、亀焼などの一様の普及、さらに稲、麦、粟を主体に生産する農業技術・文化の共通性が、奄美、

沖縄、先島の各文化の独自性を薄めていった。農業を基盤とする社会への変化が、地域の有力者(琉球の地域の有力者・首長を按司と呼ぶ（コトバンク，2014c)）を生む契機となった。勢力の強い按司が、周囲の按司を統合し、沖縄に北山、中山、南山の３つの国が作られ、琉球王国の統合へと向かう。

琉球王府は、明を宗主国とする一方で、日本の薩摩藩からの干渉と圧迫を受け、受難の道を進まざるを得なかった。19世紀後半、明治期に入り富国強兵と東アジア進出を強力に推し進めた日本は、1894年に日清戦争で中国に勝ち、翌1895年には台湾を統治下においた。琉球処分、廃藩置県、沖縄県の設置・施行、琉球国に対する日本の攻勢は矢継ぎ早に行われた。清が日清戦争に負け、琉球国の帰属問題の交渉は頓挫し宙に浮いてしまった。その間、日本は、琉球王国を日本に帰属するものとし、東アジアへの勢力拡大を加速させた。こうして、本を正せば、独立した国であった琉球王国は、日本に帰属するものとされた。

中国、韓国など東アジアへの侵略戦争を強力に進めた日本に帰属させられ、琉球王国は太平洋戦争の当事国に組み込まれることになった。沖縄・琉球は「本土」を守るための「捨て石」、「本土決戦」のための準備を整えるまでの「時間稼ぎ」として「捨て駒」の役割を担わされた（大城，2005)。草木一つ残らないほどの激しい攻撃を受けた沖縄戦だった（坂西，1990a，坂西，1990b，坂西，1990c)。そして、敗戦を迎えた。

敗戦後、沖縄は連合軍・アメリカの支配下におかれ、東アジアへの前線基地としての役割を担わされ現在に至っている。沖縄県は1972年にアメリカから日本に返還されたが、嘉手納基地、普天間基地など今なお実戦用に軍用機等が配備され、紛争地への出撃基地になっている。沖縄県の尖閣諸島を日本の国が個人所有から買い上げて国有化して以来、日中間の関係は、偶発的な軍事衝突が起きても不思議ではないほど緊迫の度を増している。

琉球の文化と島々の呼称　沖縄県は、鹿児島県の南に位置し、台湾にまで列状に連なる島々である。明治期以前は琉球王国であり、日本ではなかった。琉球王国は、薩摩藩との関わりが深く、島々の歴史的な経過は複雑だ。奄美群島から最南端の与那国島に連なる諸島は長く、名称・呼称、括り方も多様で、そこにはそれぞれに長い歴史があり、文化の違いが反映している。沖縄県の島々の呼称と括り方について見ておこう（図１参照)。

奄美群島　沖縄諸島と鹿児島県の間にある奄美群島には、鹿児島県・奄美群島全域のほかに鹿児島県・十島村（トカラ列島）が含まれる。

沖縄諸島　沖縄本島と周辺の島々からなる。本島の西方には、渡嘉敷島、座間味島を中心にした慶良間諸島がある。座間味島と阿嘉島の間にある一群の島々を指す。

大東諸島　沖縄諸島の東部にある島嶼群である。北大東島、南大東島及び無人島の沖大東島からなる。

宮古島　時には、宮古列島、宮古地方という呼び方もされる。宮古島は沖縄本島と石垣島の間にあり、多良間島を含む宮古諸島を形成する。宮古島地方気象台は、沖縄県宮古島市にある地方気象台で宮古島地方（宮古諸島）を管轄する。多良間村は宮古郡に属する。

八重山諸島　宮古諸島のさらに南方には八重山諸島がある。八重山諸島は、東京から2,000㎞、沖縄本島から400㎞。北緯24度に位置する日本最南西端の島々である。石垣島、竹富島、小浜島、黒島、鳩間島、波照間島、新城島(パナリ)、西表島、由布島、そして与那国島の10島からなる(南ぬ島 石垣空港，2014)。

先島諸島　沖縄県西部，八重山諸島と宮古諸島を総称して、先島諸島といわれる。沖縄諸島と

合せて琉球諸島と呼んでいる。先島諸島は、沖縄県のうち，北東部の沖縄諸島に比べて人口は少ないが，自然の景観と古くからの民俗資料に富んでいる（コトバンク, 2014a)。

南西諸島　海上保安庁は、鹿児島県、沖縄県の島々を南西諸島と別名で呼んでいる。九州とタイワン（台湾）島との間にある，太平洋上に飛び石状に連なる弧状列島を指す。海上保安庁水路部が用いはじめた行政上の地名である。北半は薩南諸島と呼ばれ，南半は琉球諸島と呼ばれる。薩南諸島は大隅諸島，吐噶喇（とから）列島，奄美（あまみ）群島の３諸島および口之三島（竹島，硫黄島，黒島)，草垣群島，宇治群島から成るが，狭義には上記３諸島をさすこともある（コトバンク, 2014b)。

このように、諸島のまとまりは、見方により変化し、社会・文化的背景も異なり、沖縄として簡単に一括りにすることはできない。南西諸島全体、沖縄諸島から八重山諸島まで全体をさして琉球列島ともいわれる。それぞれの名称の由来を筆者がよく理解できているわけではないので、本論考では随時自由に各名称を使用する。

沖縄文化と先島・南方の文化　琉球は、沖縄県と奄美群島を合わせた地域である。琉球文化は、平安時代、今から約千年前から形成されてきた。奄美、沖縄と先島の島々は文化を大きく異にするという。沖縄に住んでいた人間のルーツを辿ると琉球人は港川人（１万8,000年前の旧石器時代に沖縄島住んでいた）に遡り、縄文文化の影響を受けたと考えられている。対して、先島諸島は、沖縄より新しく3,000年～1,000年くらい前に独自の文化を築き、12世紀頃まで続いた（下田原貝塚、仲間第一貝塚)。この文化は、南中国、東南アジア、ポリネシア等の南方文化に連なるという。沖縄と先島は交流のない異文化圏だった。

この異なる文化が交流し始めるのが10世紀前後とされている。アジア・中国の海外貿易が盛んになった時期、二つの文化は混じり合い、お互いに似たものになっていった。交易や農業等の発達、陶器・生活用品・香料等各種の産品が各地に普及し広まるにつれ、その生産力を基盤に富の集積が進み、奄美から先島諸島一帯の社会の「政治化」が進んだ。地域の有力者（按司）は地域を統合し、グスクを築き、さらに海外貿易を発展させた。600年前（14世紀）には沖縄本島に勢力の強い按司を中心とした３つの国が生まれた。中山、南山（南部)、北山（北部）の小三国だ。15世紀初め、これら３つの小国が統合されて琉球王国が誕生した。「この琉球王国に宮古、八重山が朝貢していく、そういう形で琉球王国の領域が段々と、宮古、八重山から奄美、トカラ列島まで広がっていって琉球王国が打ち立てられるのです。琉球王国が支配した地域、…これが琉球文化圏であり、文化的に共通の地域を琉球王国が支配していくのです」(安里, 2004, p.10)。琉球王国は、武器を持たない平和な国家だったわけではなく、武装して軍備を整え、必要があれば武装し、鎮圧した。宗主国中国は、琉球王国を国として認め、支配者を王として承認した。王府は、経済的には中国・明との朝貢貿易で基盤を維持した。

以前、沖縄の青年の地域活動について聴き取り調査を行った。その折りに、沖縄県立博物館を見学し、館の展示品に武具がほとんどないという印象を持った(見落としたのかも知れない)。当時、琉球王国は、中国・清と日本の間に挟まれ、武力を用いず中立的に独立の道を確保してきた、と思った。宗主国清への朝貢関係の維持と南方諸国や中国、日本との中継貿易を主として営むことで経済を保ち、国力を維持してきた(豊見山, 2012)。こんな琉球国の歴史観しか持っていなかった。今回、石垣島の生活を経験し文化を学ぶ中で、南西諸島が個別の歴史を持ち、独自性を保つ島々から形成されながらも、次第に共通基盤が形成され、琉球王国へと政治的に統一されていく過程を知ることができた。これは、現在の沖縄、先島諸島を観光面から表層的にしか見なかった私の

捉え方を、大きく変え深めてくれるものであった。さらに、太平洋戦争が、先島、南西諸島にもたらした破壊と、市民の悲惨な犠牲がいかに膨大であったかを初めて知った貴重な機会である。石垣島の調査は、日本への琉球の帰属が、戦争の究極の惨禍をもたらしたことを教えてくれた。

30年ほど前に、観光ではなく、沖縄戦の激戦地を巡り、当時の戦争経験者の方に話しを伺う企画があり、参加させてもらった。沖縄のチビチリガマに入り聞いた戦時のガマ避難者の証言、ひめゆり記念館での学徒が死から生還するお話、座間味島での艦砲射撃についての経験者の語り等を通じ、沖縄戦の「地獄」、戦争の残虐性と軍による市民の排除と犠牲など、多くを学んだつもりでいた。今回、石垣島の歩みを辿ることを一つの取りかかりに、現地を訪れ、南西諸島の歴史を調べてみることで、身近に「琉球」を初めて少し知ることができた。現地の戦跡、史跡、記念館・博物館を訪問することは、琉球王国・沖縄ひいては現在の日本を、アジア、欧米、その他の諸国を含む世界的視野で、奥行きのある歴史的時間軸の中に位置づけることを可能にした。南西諸島、琉球列島の歴史を遡ることで、私たちに見えてくる眼前の世界が大きく変わることに気づかせてくれる有意義な機会になった。

それにしても、琉球王国自体が有力首長（按司）の内部抗争の結果成立したものであり、その過程は、生産力と財力の大きさが勢力者と彼らの政治力を発生させ、覇権争いの結果、権力者が生まれることをよく示している。今の国際情勢にも当てはまることである。

先島・琉球文化と御叶・模合・地割　石垣島独特の文化ができる歴史的背景があるという。王府時代、「あそび３日」といわれた（田里，2005）。正月３が日は、女性は掃除・炊事・洗濯・仕事一切をやらない。17世紀、18世紀王府は「あそび３日」をいましめ、農業をし、作った米を納めなさいと奨励した。沖縄独特の「のんびりした」文化は、17世紀に薩摩による琉球支配が大きな影響を及ぼしたという。田里によると沖縄の「老舗」と「砂糖」にその理由を見ることができる。「薩摩がやって来て何もかも、したたか薩摩に持って行かれた。…沖縄の人間が沖縄から外に出ていくこと、…本土に渡って仕事がやれるという構造が江戸時代にはなかった」（田里，2005，p.7）。砂糖も同様だ。「沖縄で砂糖を作って…持っていくのは基本的には薩摩の商人が船で沖縄本島から運んでいくのです。沖縄の人はヤマトウとは商売が出来なかった」。こうして「二、三百年の歴史の結果、ばたばた働けばもうかる…一生懸命働けばもうかるという世界がなかった」ことが、あくせくしない沖縄の文化的土壌を生み出した（田里，2005，p.7）。ゆったりとした沖縄庶民の生活感覚の歴史的背景の一つである。

首里王府時代前には、沖縄独特の徴税法「御叶（みかない）」があった。詳細は不明だ。王府時代には「叶米」ということばで生き残り継承されている。「小作料みたいなもの」だという。「日用銭」も近世の納税様式で今も沖縄で生きていることばだ。

「模合（ムエー）」「模合なんかにいってみんなでお金を持ち寄って助けるといいますか、あるいは同級生とか友人が集まって模合をやって親睦会をやるとか…いわゆる金銭模合も残っている」（田里，2005，p.11）。これに類した慣習が今も生きていると聞いたことがある。日本青年団協議会は、毎年３月に全国青年問題研究集会を開催している。全国各地の青年が日頃の地域の活動を持ち寄って、分科会に分かれて二泊三日語り合う。その分科会の中で、「お金がなくても、みんなでお金を出し合って、持ち回りで借りられるから大丈夫だ」という趣旨の話を沖縄の青年がしていた。金銭模合の現代版なのかも知れない。

「模合持ち」、一種の土地所有の様式である。「本土では江戸時代を通じて二つの農民層に分かれていく…農民でもちゃんとした土地を持っている人と段々土地を持たない…小作人に没落していく

人の二つの階層に分かれていきます。沖縄では、土地は個人所有されることなく、「その地域で持っている土地」で、一種の共有地だった。「沖縄の場合は基本的に田んぼも畑も王府時代は全部模合持ちと呼ばれ、極端に言えば全部部落のもの」だった（田里，2005，p.14）。土地はみんなで平等に使うものだった。個人所有ではなく、共同体として共有するという基本的な性格を持っていたのである。集落の共有地を、区割りし、一定期間作付けし土地利用することが認められる、これが「地割」である。数年後には、土地利用者の割り当てを、替える慣行があった。「それぞれの土地を部落の人たちがみんな平等に割替えていった」（田里，2005，p.17）。琉球王国時代には、本土で行われていた土地の個人所有の観念はなく、住民は共同体の所有地と考えていた。

近世、薩摩の支配が入ると、米の取れ高に応じた割合で納税する上納制に切り替わった。この流れは、土地の農産物を取れ高に応じて納めた物納からの大きな転換である。明治期に入り、廃藩置県後、土地の区割りが行われ、個人所有が求められるように、琉球に浸透していたコミュニティが共有する土地の観念が断絶することになった。1899年（明治32年）の「土地整理法」の成立による。土地整理法により、米の上納･納付から地価納税へと変わった。本土でいう「地租改正」だ。沖縄本島では18，19世紀頃から、それぞれが使う土地を２年から５年おきに配分し直し、使う人を入れ替えた。

幕藩体制と琉球文化　琉球国は、中国と日本の狭間にあり、その独立はいつも危ういものであった。日本との決定的な関わりが始まるのは江戸時代初期である。以前から、日本は強圧的に将軍への献上等を要求していたが、1609年（慶長14年）の薩摩藩の琉球征伐が、最初の大規模な琉球への直接介入だ。島津家久は琉球征伐の命令を出し、薩摩の山川港から琉球へ向け70～80隻余の軍船で約3,000もの兵を差し向けた。主軸とした薩摩軍は鉄砲隊を揃え、奄美大島・徳之島・沖永良部島の島々をつぎつぎと攻略し、沖縄島北部の運天港に上陸した。今帰仁城、読谷村を攻め、王府首里城を攻略した（沖縄県立公文書館，2008）。下克上の戦国時代、戦に明け暮れた日本武将は、この時期戦に長けていた。

島津が琉球に進攻した口実が面白い。徳川幕府への献上に応じなかったことや琉球船漂流民を救出した薩摩への対応が礼を失したこと等であった。琉球国王の尚寧は、薩摩に連行され、家康への謁見を強いられた。将軍が代わるたびに慶賀使を、琉球国王の即位時には感謝を表す謝恩使（使節一行）を江戸に派遣することを誓約させられた。使節の服装は、琉球風・中国風のものと決められた。琉球が異国であることを強調し、異国の使節を伴う薩摩藩と幕府の権威を高める意図があったという（沖縄県立公文書館，2008）。それまで中国･明から一つの独立国として認められ（冊封）、東南アジアとの交易の重要な位置を占めてきた。薩摩軍の琉球侵攻により、王国の独立性は実質的に失われた。この時の戦の様子は「絵本琉球軍記」に描かれ記述されているという。王国としての組織・形態は存続したものの首里城は占拠され、「奄美大島を薩摩蕃に割譲し、多額の納税義務を負うなど従属的な関係」（同上，p.43）となった。

二種類の琉球使節が設けられた。一つは「慶賀使」で、徳川将軍が代替わりしたとき祝賀のために派遣された。他方は「謝恩使」で、琉球国王が替わるたびに江戸挨拶に使節を送った。琉球使節が江戸に出向くことは「江戸上り」と呼ばれた（同上，p.45）。薩摩は、「薩摩の命ずる以外に唐（明国）への誂物を停止する事」等、掟十五箇条を発布し（慶長十六年・1611年）、貿易、相続の規制と管理、風俗の取り締まりを強化した（同上，p.43）。

ところで、徳川幕府は、豊臣秀吉が企てた二次にわたる残虐極まる朝鮮侵略（文禄・慶長の役：辰倭乱）（坂西，2006）以来断絶していた国交を回復させた。朝鮮通信使の江戸来訪である（1607

図２　琉球使節も宿した福禅寺（対潮楼）

図３　日本一の景観「対潮楼」からの鞆の浦

～1811)。初期の通信使の来航目的は、秀吉が捕虜として日本に連行した朝鮮の人々を連れ戻すこと（刷還）であった（ネットワーク朝鮮通信使展，1994，pp.53-54)。朝鮮通史一行は、国を挙げて歓迎され、外交と文化両面で日本に大きな影響を及ぼした。当時、「日本は……朝鮮と琉球を好みを交わす外交のある国『通信の国』、中国とオランダを貿易船渡来の国『通商の国』として往来を認めていた」(同上，1994)。琉球からも江戸に使節を送ったが、朝鮮通史は別格であった。朝鮮通史は、要所要所で停泊・宿泊し、熱烈に歓迎され歓待を受けた。日本一の景観・景勝地と称賛された福山藩鞆の浦・福禅寺（図２）には、通史が書いた詩や命名した「対潮楼」(図３）の書が残されている。

図４　金剛力士像（門左）

図５　桃林寺

図６　密述力士像（門右）

琉球の衣装で朝貢する使節は、異国風情を醸し出し、幕府の権勢を民衆に誇示するには大きな効果があったであろう。琉球使節もまた、鞆の浦の福善寺を宿坊の一つにし、美景を前に対潮楼で旅の疲れを癒したという。それにしても、琉球使節の旅は、朝鮮通史以上に遠路・長路である。その人的・財政的負担は、琉球王国にとって相当重かったと思われる。

薩摩藩の琉球列島の村民への暴力・狼藉はひどいものだった。史書・伝統継承品等の破損の禁止と保存、私財等の略奪は厳に慎むことが攻略軍には指示され徹底されたというが、実際には兵の無軌道な行動、略取はひどかったらしい（本田，1999)。

日本の侵略が、琉球王国に及ぼした影響は大きかった。琉球への仏教の伝来は14世紀頃だ（梅木，2011)。沖縄本島から遙か南に位置する島が石垣島である。島には、桃林寺（図５）があり、開山は1611年だという。臨済宗妙心派、禅寺（当初は真言宗）である。権現堂は、石垣島に残る

沖縄最古の木造建築で、寺門の両脇には二体の木造彫刻の仁王像（金剛力士像，図４・図６）が立っている。寺は1614年に薩摩藩の進言により建てられた八重山初の寺である。境内にある権現堂（熊野権現）は津波の被害に遭ったが、1786年に再建された。仁王像は県指定有形文化財に、権現堂は国指定の重要文化財になっている。門の両脇にある二軀の力士像は、元文二年（1737年）に文明氏久手堅仁屋昌忠による作と書かれている。八重山島産の「ドシス（おがたまの木）」で作られている。沖縄の古刹であり、琉球王国への日本の覇権・文化の影響を象徴している。

琉球は独立国であったとはいえ、日本の幕藩体制に組み込まれ、日本文化の吸収を余儀なくされた。島津家久は徳川家康から琉球の支配権を与えられるとともに、奄美諸島（大島・徳之島・喜界島・沖永良部島・与論島の五島）は薩摩の直轄領になった。先祖崇拝、御嶽信仰が琉球、八重山の土着の信仰であり、異質の仏教の移入は日本化が流入したことを示す典型といえよう。

御嶽信仰・自然崇拝　沖縄の島々には、木がうっそうと茂る山の麓に鳥居が立ち、薄暗い登り口になっている神秘的な雰囲気を漂わせる所がある。平地にも神々が降り立つ神聖な居所がある。御嶽だ。御嶽の前面にはお祈りをする場所があり、その奥には巫女・司（ノロ）しか入ることができない聖域がある。一般の人々はこの領域に立ち入ってはならない。拝所と聖域を含む一帯が、

図７　石垣市内の御嶽拝殿と大木

図８　拝殿裏の司の祈祷所

自然崇拝、祖先崇拝を基本とする御嶽といわれる聖地である。石垣島でも御嶽は沢山存在する。市内の身近なところにも御嶽はある（図７，図８）。掲載の写真から確認できるように、御嶽には、

図９　西表島干立の御嶽

図10　拝所への山道

大木や大岩があることが多い。神木や霊石のある場所を「イビ」（威部）、「ウブ」などと呼び、そこには神が宿り、神聖なものと考えられているのだ。拝殿、御嶽を囲む石垣、鳥居などがあるが、それらは後から作られてきたものだという。鳥居については、複数の説があるようだが、日本の影

響があったといわれる（波照間，1988）。この点については、後で簡単に触れる。

図９、図10は西表島の御嶽である。小高い山が御嶽であり、うっそうとした木々に囲まれた山道・石段を登ったところに拝所がある。拝殿はない。昔は海岸に面した岬の上に集落があり、集落下の砂浜と岩場に御嶽があった。干潮時には御嶽に参ることができたが、満潮時には浜は水中になるところだった。現在の御嶽には、石の香炉が８つあり、一人の巫女が（香炉一つ）30年くらい務めたとすると、240年以上前からあったと推定できることになる。今、香炉は一つ紛失してしまっている。干立村には、浜にも拝所があり、祈祷所の奥は神が降り立つ神聖な地で、巫女以外は足を踏み入れてはならい。最近では、何も知らない観光客が聖地に出入りし「村では困っている」と案内してもらった村人が話してくれた。

前掲の図７、図８は石垣市内（新川）にある御嶽である。街の一角にあり、拝殿が建っている。そこには樹齢200年～300年といわれるみごとなクワ科のオオバアコウ（方言でアコー）の巨木がある。真乙姥（まいつば）御嶽である。拝殿の裏には、聖地が設けられている。境内では豊穣祈願の祭りなどが行われる。

御嶽信仰とはどのようなものか、資料（石垣市総務部市史編集課，2004）で見てみよう。島の人びとは、森羅万象すべては神の創造によると考えてきた。自然の恵み、災害、病気や事故や厄災も神の摂理、支配によるものと捉えられてきた。島民は、神として御嶽を尊び、崇拝してきた。御嶽には不思議な石や火の話、言い伝えがあるという。神々は、平時は天上で人々の安寧を見守り、祭りのときなどに御嶽に降りてくる。水元の神、豊年・豊作の神、航海の安全の神、村の平和・安全の神、村人の健康・長寿の神など御嶽には多くの神々が居ると信じられている。島で一番高い山、於茂登岳（大本岳・宇本岳，525ｍ）は山の神（ウムトウテイラスヌカン・大本照らすの神）であり、山全体がイビ（威部・祈願所）である。山は水源地であり、自然や農作物、人々を潤す神でもある。山麓の村には「水元」と言われる場所があり、雨乞いの祈願が行われてきた。農業は島の基幹産業の一つだ。

図11　竹富島の御嶽（オモト岳）

図12　竹富島の御嶽

図11は、竹富島の御嶽に掲示されている説明だ。「仲筋御嶽　竹富島では御嶽（ウタキ）のことをオン、あるいはヤマ※と言います。仲筋御嶽は島人が大切にしているムーヤマ（六山）の一つです。ここに祀られている　新志花重成（アラバナカサリナ）は、仲筋（ナージ）村の村建ての神で沖縄島から渡来し、竹富島に鉄を伝えたと伝えられ、麦の神として崇められています。また、この御嶽が通称『サージオン』と呼ばれ親しまれているのは、『サージョ』という地名に由来しているからです。御嶽は神聖な場所なので、むやみに立ち入らないでください。（※ムーヤマ……破

座間御嶽（ウーリャオン）、仲筋御嶽（サージオン）、幸本御嶽（コントウオン）、久間原御嶽（クマーラオン）、花城御嶽（ハナックオン）、波利御嶽（パイヤーオン））。沖縄本島から鉄器が伝来したと書かれ、竹富島が本島とは異なる文化を持っていたことが示唆されている。さらに、次のように説明されている。

御嶽では、地域の行事の催行や伝統芸能の奉納が行われてきた(図12)。「竹富御嶽　清明御嶽(前の御嶽)　この御嶽には、島造りの神と石垣島のオモト岳の神を祀っています。最初この御嶽の神様が竹富を造りました。その後、オモト岳の神様から依頼があり、両神は協力して石垣島を造り、それから八重の島々を造ったそうです。この両側の道は、北の美崎浜から南のカイジ浜へと竹富島を貫く道路であり、その一部はナビンド（神の道）と呼ばれています。その道沿いには、波座間御嶽、仲筋御嶽、幸本御嶽があります。旧暦８月初めの頃ここで行われる結願祭は、明治八年に豊作祈願が叶った感謝祭として始められました。その祭りでは「始番狂言」「芋掘狂言」などの芸能が奉納されます」。御嶽は、村の守り神として人々に信仰されているのである。

自然崇拝　御嶽は自然の力を崇める人々の素朴な信仰が根底にあるといえよう。西表島の御嶽には「拝所の沿革　昭和十六年沖縄県は十五ケ年振興計画自作農創設法に基づきこの地に新城両島民を主体に入植事業を進め公共施設の一つに拝所をハテル山の麓に建て新城両島の神々を合神し昭和二〇年五月鎮座祭を行ふとしたが敵の空爆にはばまれてその実現空しく終戦となった。戦後人々は地域再建の中で拝所の位置は遠すぎるとしてこの所を聖地と定め昭和二十二年新城上地島から分神して神社を建てた。月日は流れて五〇年沿革の碑を建立」と記され、戦時中に神社が建立された経緯がわかる。「御神体＝光熱　酸素　水素＝自然」と刻字され、御神体が自然であることが明記されている。自然に対する畏敬の念と崇拝が表わされていて、神社と記されているが御嶽信仰が背景にあると思われる（図13, 図14)。

図13　「拝所の沿革」

図14　戦後移転した西表島の御嶽

御嶽には自然の偉大な力が宿ると信じられている。御嶽にある大木や大岩は、人間界を越えた大きな力の象徴と考えられてきた。「人間より長く生きる力を持った大木、変わることのない大岩の姿に、島人たちは、人の力を超えた霊力（不思議な力）の存在を感じ、そこに神は宿ると信じ、拝むようになったものと思われます」。石垣市の市史編集課では、御嶽の自然信仰をこのように紹介している（石垣市総務部市史編集課，2004，p.37)。万物を支配し、調和を生み出す自然の摂理を崇高なものとして崇め、島の人々は驚きと畏敬の念をもって御嶽を拝した。

御嶽での祈願は女性が取り仕切る。こうした女性の司、神女が、豊作や地域の人々の幸せ、船旅の安全などの祈願をする。農作物の豊穣を願い、穀物を神に献上する習慣は沖縄に限らず一般的に行われる。石垣島では、地域により五穀の種類は異なり、米・麦・粟・豆・黍であったり、豆の代わりに大豆や芋であったりする。興味深く思ったのは、神事として綱引きが行われることだ。綱引きは、天の恵みである雨・水への祈願であり、雄雲と雌雲（雄綱と雌綱）の交わりによって雨が降ると考えられてきたという。両者の関係を象徴的に表現したものが豊年祭などで行われる綱引きだ。折しも今年（2014年）は、八重山地方は降雨が少なく、市の広報車が「23時から翌朝６時までの断水」を知らせている。水は生命維持の源泉であり、大切にされてきた。干立村の御嶽入り口の両脇には枯れることのない神聖な井戸があった（今水は出ない）。

御嶽へのお祈り、祈祷は、女性司が行う。御岳信仰では、女性の持つ神的な力が人々を守ると考えられているという。女性が持つ神秘的な霊力を人々は信じた。女性司の偉大な力とそれを支える社会的背景及び時代的な変化について、高野（1992）は次のように説明する。姉妹（オナリ）がその兄弟（エリケ）を守護する霊力をもつという信仰が、奄美諸島から八重山諸島まで、広く見いだせることはよく知られている。御嶽信仰には、このオナリ信仰とノロ・ツカサ（村々の祭司）制など、多くの要素が関わり合っている。沖縄の御嶽の祭配組織は、村落共同体を構成する主要な血族集団から、オナリ神をひとつの理想として選ばれた女性を中心に形成された。村の起源と歴史の象徴であり、神の降り立つ、ないしは、神の訪れる場所である御嶽と，その御嶽に縁が深い族集団との間に介在し、豊穣と繁栄を祈願する祭司である女性神役は、従って、姉妹が兄弟に対する場合と同じような愛着を出自集団に対して持ち、その繁栄のために献身することを要求された。その奉仕とカリスマ性は、琉球王朝の神女組織のもとでは俸給によって物的に支えられてきたのだが、現在では無償の奉仕を要求されている。社会の変化で人々の流出が激しくなり、島の経済の自立性が失われるにつれ，御嶽の祭司達に求められてきたこの起源と出自への向心性はなによりも彼女たちにとって桎梏となりつつある（高野，1992, pp.123-124）。共同体の維持と祭礼・祭祀の挙行には、有力者、祭司、血縁集団等複雑な関係が関わり、地域社会が拡散する現代の社会にあっては伝統的神事を継承する難しさがある。

石垣市の中心部への人口の集中は加速しており、学校の統廃合が進み、地域の文化を維持することは一般的に難しくなってきている。

御嶽と鳥居　島々にはたくさんの御嶽がある。見て回っているうちにどこにも入口に鳥居があることに気がついた。鳥居は、本土の神社には必ずあり、神社信仰・神道の象徴的な形象、建造物だ、とばかり思っていた。自然崇拝を中心とする御嶽に鳥居があることに違和感を覚え、その由来を知りたいと思った。御嶽と鳥居の関係の詳細は、未だ不明のようだ。しかし、江戸時代初期以降、日本の神社信仰・神道が鳥居設置に影響を及ぼした可能性が指摘されている。波照間（1999）は、本州の神社の鳥居が南西諸島の御嶽に影響を及ぼす過程を次のように論考した。鳥居の浸透は、支配国の文化を形式的・表面的に庶民が取り入れて媒介し、御嶽に融合させたと。

「嶽域正面の入口には鳥居が建てられている。鳥居はほとんどがコソクリート製であるが、西表島や与那国などでは木製の鳥居もみられる。また、鳩間島のオンの神棚に鳥居のミニチュアが奉ぜられていることは、八重山のオソの鳥居の発生についての下の伊波普猷の発言とあわせてみると興味深いものがある。沖縄の御嶽一般に鳥居がない。それに対し、近代以前より八重山のオンには鳥居があった。これは八重山のオンの構造の１つの特徴としてとらえられる」（同上，p.12）。その鳥居の発生は「鳥居は大和在番が任満ちて帰国するとき、海上の平安を祈る為に寄進したも

ので、那覇駐在の在番奉行が同じ場合に、普天間その他の神社などに之を寄進したものと同じ気持の現われだとの理解もある。八重山における大和在番の制度は、1641年に設けられたが、７年後の1648年には廃止されたのであるから、その間に八重山にひろく存するオンの鳥居のすべてについて説明することはむつかしいのではなかろうか。鳥居は、幕府役人が離任に当たり、琉球の神社に寄進したことに起源があるとする考えがあるが、短期間に琉球国全体に鳥居が広まるには無理がある」（同上, p.12）と波照間はいう。

「（牧野清氏）寄進だけでは離島まで深く浸透している事実は説明し難い。神域の象徴として権現堂にならい、大和文化に著しく触発されたあの頃の時代的背景の下に、島民自からが進んで御嶽に鳥居を建てた。それなればこそ、群島の各島々まで浸透したに違いない」。各島人が自ら進んで鳥居を御嶽と融合させたからこそ、すぐに普及したと推測している。「八重山のほとんどのオンが鳥居を有する事情はおそらく民衆的活動によるものであろう。しかし、例えば、現在もオン信仰を固く保持する波照間のオンがいずれも鳥居をもたないことなどは、鳥居の設置を日本同化のシンボルとする、近代以後の思想的な動きもまたあったことを考えさせる。いずれにせよ日本文化の摂取例である」、としている（同上, p.12）。琉球を日本の一部とし、琉球の御嶽信仰に鳥居を融和させることにより、日本文化であることを象徴的に表現させたということであろうか。

大地震大津波と村の移転　東日本大震災では、未曾有の大津波が襲い、太平洋岸に壊滅的な被害をもたらした。福島第一原子力発電所の爆発、放射性物質の日本中、さらには世界中への拡散を引き起こした主要な原因になった巨大な地震・津波が発生した。地震の規模があまりに大きく、押し寄せた津波の想像を絶する量と破壊力のすさまじさに、「想定外」ということばが連発された。しかし、同規模の地震・大津波が過去になかったわけではない。大津波については古くから言い伝えられて、記録にも記されている。八重山・石垣島では、江戸時代に大津波の襲来があり、多くの犠牲者が出たことはよく知られている。

バンナ岳の頂上に天文台がある。中腹には展望台があり、市街と石垣港を一望できる。「津波はこの山にも押し寄せ、下に見える小さい山を越えて反対側の海に出た。そのとき、石が山を越えては運ばれてきた」、地元の人の話しだ。多少の誇張はあるかも知れないが、未曾有の海嘯が島を呑み込んだ。惨状は記録が証明している。島の歴史の一つである。

東北大震災時の大津波で引き合いに出されるのが、1,000年前平安時代に起きた貞観地震と大津波だ。現在に至るまで大地震と津波はたびたび起き、その都度集落が流され消滅することも少なくなかった。津波を恐れ、集落や村を高台に移転し、再建したところもある。決して東日本大震災の類例がなかったわけではない。今の私たちには「科学的」に地震・津波を予知する力がないということである。地震発生のメカニズムは未解明で、過去の巨大地震から現在の巨大地震発生までの時間軸があまりに長く、検証不能である。個人の経験を超え、古来人々が伝承し蓄積してきた経験知に学ぶしか術がないのが実情である。

「三代実録」に貞観三陸津波が記録されている（都司, 2012a）。被災の様子は、東日本大震災に似ているという。貞観11年（869年）５月26日に大地震が陸奥の国（現在の青森県・岩手県・宮城県、福島県）を襲った。夜空に光が走り、辺りは昼のように照らされた。人々は叫び、牛馬は恐れおののき暴れた。城郭・蔵・壁の崩壊は数知れない。倒壊家屋の下敷きになる者、地割れに落ち埋もれる者もいた。（「貞観11年５月」廿六日癸未、陸奥国地大震動。流光如昼隠映。頃之。人民叫呼。伏不能起。或屋仆圧死。或地裂埋殪。馬牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不知其数。）天地がひっくり返る大惨事だった

その後、大津波が襲来した。「海の方では動物がほえるような音が聞こえ、その音は雷のようであった。陸をさかのぼった海水は、陸地深く浸入し、あっという間に城下に達した。海水は海岸から数十里、あるいは百里（当時の１里は約600ｍ、100里は約60㎞）に達し、原野や道路は果てしなく青黒い泥水に洗われた。船に乗る間もなく、山に登ることもできず、溺れ死んだ者は1,000人ほどもいた。財産や収穫した農作物などはほとんど何も残らなかった」（海口哮吼。声似雷霆。驚濤涌潮。泝洄（さくかい）漲長。忽至城下。去海数十百里。浩々不弁其涯涘。原野道路。惣為滄溟。乗船不遑。登山難及。溺死者千許（ばかり）。資産苗稼。殆無孑遺焉。）。津波は陸地奥深くまで押し寄せすべてが洗い流され、溺死者は相当の数に上った。東日本大震災の大津波を彷彿とさせる。

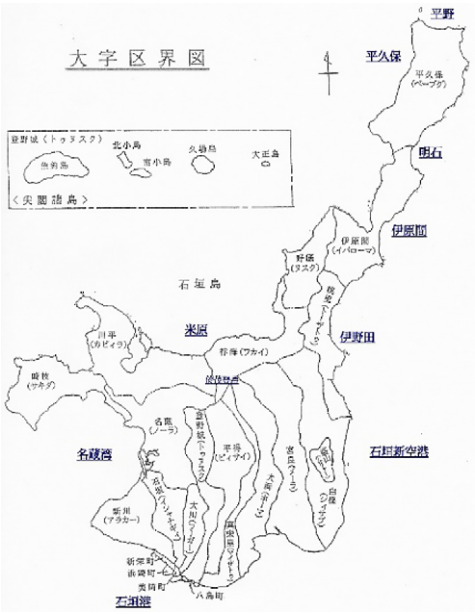

図15　石垣島の大字区界図

東北太平洋岸を襲う津波は、これ以外にも明治三陸津波、昭和８年三陸津波などがあり、何れも津波は高さ30ｍを超える地点にまで達している。津波により、甚大な被害を受け、集落・村を高台に移転した地域は、全国に点在している（都司，2012b）。三重県鳥羽市国崎・大津は、明応津波（1498年）で大津神戸の集落が壊滅し、生存者たちは寺とともに国崎に合併移転し、もとの大津の市街地は放棄された。静岡県伊豆市小下田の丁ノ田（ちょんのだ）は、同じく明応地震津波のために水田、家屋とも流された。津波後、かろうじて生き残った人々は背後の丘陵の上の海抜100ｍ以上の藤沢という土地に新しく集落を作った。愛知県境にある静岡県湖西市白須賀は、宝永４年10月４日（1707年10月28日）に、東海沖と南海沖の２つの震源にまたがって起きた二連動の海溝型巨大地震に襲われた。地震による津波の被害は、紀伊半島、四国の海岸で特に大きかった。白須賀宿は、幕府の財政支援により潮見坂上の台地の上に全面的に移転した。集落全体を安全な地に移さざるを得ないほどだったのだ。

また、宝永の津波は高知県土佐清水市三崎に甚大な被害をもたらした。周辺で九死に一生を得た住民たちは、みな平野部に住み続けるのを恐れ「平ノ段」と呼ばれる標高30ｍほどの台地の上に移住した。

長大な歴史的時間間隔で、日本列島は大地震とそれに伴う大津波に何度となく見舞われてきたのである。古くからの商業大都市大阪も、江戸時代の「安政南海地震」、「宝永地震」、そして中世の「正平地震」、古代の「五幾七道地震」の４度の「歴史地震」によって、大きな津波被害を受けてきたほどだ（都司，2012c）。

石垣島・八重山諸島もまた例外ではなく、明和年間に大地震と海嘯に遭い、壊滅的な被害を受けている。図15は石垣島の大字の地区割りの図である。地域によっては、海嘯により根こそぎさらわれ、そのままでは存続することが難しくなった。明和８年（1771年）の明和の大地震・大津波である。今から四半世紀近く前（243年）のことだ。記録によれば島の太平洋に面した地域（白保など）の被害が大きかった（図15）。

石垣市史（石垣市総務部市史編集課，2004）によれば当時の被害は計り知れないほどのものだった。朝８時頃大地震があり、直後に潮が引いた後、三度にわたって津波が押し寄せた。波の高

さは、「二十八丈（一丈＝3.03ｍとすると85ｍ）」、あるいは「十五～十六丈（45～47ｍ）」、「二～三丈（６～９ｍ）」もあったといわれる。平地･低地はすべてが流された。溺れる人、負傷した人、性別、誰彼の見分け判別のつかない人々、泥に埋もれ木に掛かる死体、惨状が目の前に広がっていても、誰もが襲い来る海嘯を恐れ山に登ったため、救出もできなかった。「多くの死骸が寄り揚がったが、その始末も忘れ皆々周章狼狽していた折り、平得村の番所と村の半分が流されたとの知らせがあり、続いて真栄里・大浜・白保・桃里の仲歟銘、伊原間の役所、船越、安良、崎枝の屋良部、合計八村は跡形もなく引き崩され、死人が数多で処理できぬと早打ちの報告が相次ぎ、諸人はいよいよもって正気を失い、騒ぎは島中に絶する程であった」（石垣市総務部市史編集課，2004）。船も壊れ中々調達できず、島は混乱の極致に達していた。白保は、波照間島からの強制移民で再建したほどだ。石垣島の被害が大きく、与那国島では被害はほとんどなかったと記録されている。村々の死者は３割から９割弱と地域による違いが大きい（石垣市総務部市史編集課，2011）。

被害の大きさには、目を覆うばかりである。平得村は、住民1,178人（男558人，女620人）のところ、犠牲者は溺死560人（男225人，女335人）だった。家屋178軒、番所１カ所、役人詰屋６軒、牛21疋、馬61疋、の被害があった。村は、生き残った住民が元のところに再建した。津波が浸水した地点は、「糸数浜より被災地まで、潮が揚がった高さは八丈六尺（約26ｍ）」だった。糸数浜から村の最高地点までの高さは七丈五尺とあり、津波が村を呑み込んだことがわかる。

真栄里村の災禍はさらに甚大だった。住民は、1,176人（男523人，女653人）のうち、908人（男345人、女563人）が溺死した。家屋176軒、番所１カ所、役人詰屋６軒、牛４頭、馬22頭、の被害があった。流失ししばらく耕作できない農地もあった。「村は形跡も残らず引き崩されて石原になり、わずかに生き残った男178人、女87人では村の再建はできないので、野国親雲上が在番の時に願い出て、西表村より男115人、女178人、合計313人を寄百姓し、残った人数と合わせて合計558人で、元の村の敷地より北北東一三町七間の嘉謝内原という所に村を建てた」（石垣市総務部市史編集課，2004，p.64）。津波が押し寄せた地点は、「糸数浜より元の村敷地の被災地まで、潮が揚がった高さは六丈四尺（約19.4ｍ）であった。新しい村は、糸数浜から村の最高地点までの高さが一二丈とあり、村の敷地を津波の浸水域より高い所に移したことが読み取れる。移転に伴い、平得村が管轄していた『地城御嶽』を在番所に願い出て、真栄里村の管轄に移し、拝所にしたとある。白保村は、波照間島からの寄百姓で村を再建した」（石垣市総務部市史編集課，2011，p.33）。

寄席百姓は、大津波以前から行われていた。八重山の総人口は、28,992人であったが、この天変地異により「百姓等」9,313人が死亡した。全体の三分の一の人々が亡くなる大惨事だった。牛馬の被害も上げられており、八重山では当時から家畜が多く飼われていたことを示している。

琉球処分・廃藩置県と南西諸島の現在

1609年薩摩藩・島津軍が琉球を征服し、在番所を配し実質的に支配した。その後、日本は明治５（1872）年に琉球国を廃止して琉球藩とし，中央・幕府の管轄にした。その後1879年、廃藩置県により沖縄県とした。この間の日本政府の琉球王府に対する強硬措置が琉球処分だ。琉球処分により、琉球王国は滅んだ。このとき琉球国の帰属国をめぐり中国から抗議があり、琉球の二分割、三分割案が提案された。奄美は日本に、先島は中国に帰属させ、沖縄諸島に琉球王国を再建する、

これが中国の三分割案だった。他方の二分割案は、奄美、沖縄は日本に、先島は中国に帰属させるというもので、日本はこの案で決着を見込んでいた。琉球の人々は、王国が分割されては国の形も何もなくなることを恐れ、中国に渡り清朝に背後から分割拒否の働きかけをしていた。

「日清戦争が始まりまして、中国は戦争に負け、あとはうやむやのうちに、琉球の日本への帰属が確定していく、という経過をたどっています」。安里氏の指摘を読んで沖縄、琉球のことを何も知らない自分を知った。氏の次のことばは意味深長だ。「琉球というのは、こういう綱渡りをするようなところを流れまして、日本の国の一部になっているのです。こういう歴史的な背景を持つ地域が今後、未来永劫にわたって日本国家の一員として続くかどうか、歴史を振り返った時にこの先は分からない、と思うのです。世界、アジアが変動していけば沖縄の歴史の流れというのは日本の国の一部で安泰であるか、どうか、歴史を振り返ればそうは断定できないのではなかろうか」(安里, 2004, p13)。まさに戦争と領土の問題として、現代に深く関わる問題だ。

沖縄県の尖閣諸島（魚釣島、北小島、南小島）が、2012年９月11日、日本政府によって購入され、私有地から国有地になった。領土問題「棚上げ」状態の時期から、日本は三島を実効支配してきた。三島の国有化を一つの契機に、中国は領有権問題として強く抗議している。魚釣島は台湾、石垣島から170㎞離れている。

図16　石垣港の巡視船「よなくに」「しきね」

図17　石垣港配備の新規建造巡視船「なぐら」

尖閣諸島の近海は良好な漁場だ。領有権問題が表面化し、軍事衝突が懸念されるようになった。石垣島の漁師は島周辺への出漁を控えるようになったという。日本側の抗議にもかかわらず、尖閣諸島の周辺では今も中国の監視船による日本の領海への侵入が繰り返され、中国漁船による領海侵入も増えている（NHK, 2014)。尖閣諸島の領土問題は、漁業などを通じて沖縄県・先島諸島の市民の生活に大きな影響を及ぼしている。

八重山諸島の現在・過去　一方で、中国の記事は次のように記述している。「論文で琉球に触れた目的は第１に釣魚島（日本名・尖閣諸島）が琉球に属さないことを論証するため、第２に琉球は歴史的にも日本のものではないことを説明するためだ。これによっていわゆる釣魚島は日本固有の領土との見解に反論を加えた。日本政府が過剰に反応しているのは、琉球を侵略、併呑した歴史に当然触れてほしくないからだ。日本が多くの問題で歴史を否認しているのと同様、安倍氏は現在『侵略』の一語についてさえ弁解しようとしている」と指摘。「琉球問題は再び議論しても、しなくてもいい。だが議論しないのは歴史を否認することとイコールではない。議論しないのなら、日本は釣魚島問題における居丈高な姿勢を変えなければならない」と述べた。環球時報が伝えた内容の一部だ（人民日報社, 2013)。独立国であった琉球王国の歴史に触れている。

琉球新報（2013）もまた、琉球王国、沖縄の歴史に触れながら、尖閣諸島の領有権問題を次のようにまとめている。「中国共産党機関紙の人民日報が『琉球の帰属は歴史的に未解決』と主張し、沖縄の位置付けも議論すべきだとの論文を発表した。論文は『琉球は独立国家で、明初から明朝皇帝の冊封を受けた、明・清期の中国の藩属国だ』とした上で、『琉球処分』に触れ、日本が武力で強制的に併呑（へいどん）したと指摘。尖閣と同様、日本が敗戦を受け入れた時点で日本の領有権はなくなったとの認識を示した。琉球が中国の冊封体制下にあったのは歴史的事実だが、外交儀礼的な朝貢関係であり、属国ではない。論文の執筆者の１人は『琉球は歴史的に独立国。「中国のものだから、取り戻せ」と主張するものではない』と中国紙に答えている…。一方、論文が指摘するように、沖縄の歴史的な歩みは複雑だ。薩摩侵攻や『琉球処分』を源流とするような、苦難を強いられる状況は今なお続く。日本政府が民主国家のらち外に沖縄を置き続けている現状が、中国側の要らぬ挑発を招いている面があることも忘れてはならない」。琉球王国が、中国と日本の狭間で独立を維持してきた厳しい歴史が、沖縄・尖閣諸島を巡る日中間の軋轢問題の根底にあることを認識しなければならない。

尖閣諸島の日中間の領有権問題への日本の対処は、徐々に強化されている（図16）。警戒の最前線にある石垣島には巡視船「なぐら」（図17）と「たけとみ」の二隻が配備されている。両船の建造･配備は、NHK等各紙･報道機関が報じた。日中の緊迫した現状を示す資料として引用しておく。

海上保安新聞　海上保安庁の新鋭大型巡視船「たけとみ」と「なぐら」が完成し、引き渡し式が９月26日、三菱重工業㈱下関造船所で行われた。尖閣諸島の領海警備強化のために整備中の「尖閣領海警備専従体制」の新造巡視船10隻の１番船と２番船にあたる。両船は十一管本部石垣保安部配属となり、10月下旬にも警備業務に従事する。　すがすがしく晴れ渡った秋空のもと、岸壁に全長約96㍍の２隻が並ぶ。式典では、引渡書と受領書の授受が行われ、続いて、三菱重工の社旗に替わって、紺色の海上保安庁旗がマストに掲げられた。両船の乗組員紹介の後、天谷直昭・本庁総務部長が佐藤雄二長官の訓示を代読。「業務遂行能力を向上させた両船が、国民の安心安全に大きく寄与するものと確信している。乗組員諸君は、我が国周辺海域の海上保安の要となり、地元関係者、国民の期待に存分に応えるべく、業務にまい進していただきたい」と期待を述べた。　当日は、報道機関12社が取材に訪れ、関心の高さがうかがわれた。山田孝雄船長は報道陣に「本船の最新の装備を最大限活用し、安全かつ的確に業務を遂行できるように船内の体制を確立したい」と抱負を述べた。また、海上保安友の会七管支部の会員37人が招待され、式を見学した。両船は、十一管区に配備されている「くにがみ」「もとぶ」と同型。ヘリコプターが離発着できる甲板を持ち、排水量型でしけにも強く、速力25ノット以上を誇る。20㍉機関砲や遠隔監視採証装置、停船命令表示装置を備えるなど優れた監視・規制能力を持つ。尖閣専従体制は、1000㌧型新造巡視船10隻と、既存のヘリコプター搭載型巡視船２隻の計12隻からなり、一部に複数クルー制を導入することで「大型巡視船14隻相当」の働きをする。

新造巡視船は「たけとみ」「なぐら」に続き、３、４番船が下関造船所ですでに進水を終え、完成に向け建造中。また、５、６番船もジャパン・マリンユナイテッド磯子工場で進水している。平成26年度中に新造巡視船４隻が就役し、27年度末までに専従体制が整う予定だ。尖閣列島の巡視に当たるために、機能・装備を向上させた巡視船である。2014年10月25日には、石垣港に実戦配備された。（第七管区海上保安本部，2014）

読売新聞　沖縄県の尖閣諸島周辺海域の警備を強化するため、石垣海上保安部に配備された最新型の巡視船２隻の就役式が25日、行われました。石垣海上保安部に新たに配備されたのは最新型の大型巡視船、「たけとみ」と「なぐら」の２隻です。25日は石垣市内で２隻の就役式が行われ、海上保安庁の佐藤雄二長官が「尖閣諸島周辺の警備は、２年前の国有化以来、中国公船が領海に侵入するなど大変緊迫した状態が続いて

いる。海上保安庁始まって以来の大型強化であり、地域の安心安全の確保に努めてほしい」とあいさつしました。２隻はそれぞれ、全長96メートル、総トン数1500トンの大型巡視船で、ヘリコプターが発着できる甲板や、射撃精度が向上した20ミリ機関砲などが備えられています。海上保安庁は、今回の２隻に加え、今年度中にもう２隻、来年度中にはさらに６隻の、あわせて10隻を配備し、尖閣諸島の周辺海域を警備する体制を整える計画です。巡視船の豊田力船長は「最新の船の能力を駆使して、乗組員が一丸となって、的確に対応していきたい」と話していました。また山田孝雄船長は、「尖閣諸島周辺の情勢は依然厳しいが、決められた業務を冷静に遂行していきたい」と話していました。(読売新聞, 2014)

沖縄タイムス　尖閣諸島周辺の領海警備強化を目的に、新造した巡視船「たけとみ」と「なぐら」の２隻が石垣海上保安部に配属され、25日、就役披露式が石垣市内で開かれた。　海上保安庁は尖閣警備の専従体制として、第11管区海上保安本部に本年度にさらに２隻、来年度には６隻を新造、配属させる予定。就役式で佐藤雄二海上保安庁長官は尖閣近海の中国公船には「冷静に対処する」とした上で「これほどの機能強化は海上保安庁66年の歴史で初めて。領海警備やレジャー（事故）の即応態勢など地域の期待に応えたい」と語った。(沖縄タイムス, 2014)

八重山日報　石垣海上保安部（赤津洋一部長）に配備された新鋭大型巡視船「たけとみ」、「なぐら」の就役披露式・船内見学会が25日午後、市内ホテル（南の美ら花ホテルミヤヒラ)、巡視船「たけとみ」で開かれた。海上保安庁では、尖閣諸島周辺海域の警備強化を図るために、「尖閣領海警備専従体制」を敷き、来年度までに新造船10隻を石垣海保に配置。「たけとみ」、「なぐら」はその、１、２番船となる。佐藤雄二海上保安庁長官は「海保庁創設66年間で初の大規模な増強。最新鋭の船をフル活用し、地域住民の期待に応えたい」と抱負を述べた。この日の披露式に200人余、見学会には100人余の八重山３市町の住民や海上保安庁関係者が出席し、関心と期待の高さが示された。(八重山日報, 2014)

石垣島に配備されている海上保安庁の巡視船には、「あだん」「いしがき」「やえやま」「はてるま」「さきしま」など、島や地元の植物の名が多くつけられている。警備強化のために、北は青森県弘前市や東京都からも巡視船（「ひろさき」や「しきね」）が巡航してきている。沖縄・琉球、先島・八重山の歴史を知ることなくして、日本の現代を理解することはできない。

太平洋戦争の悲劇　ひめゆり学徒、白旗の少女など、凄惨な沖縄戦については本を読んだり、現地を訪問したりして少しは見聞していた。1989年には、沖縄の戦跡を訪問し、住民が「集団自決」せざるを得なくなったガマ（防空壕として用いられた鍾乳洞）に入った。壕内には避難生活で用いた一升瓶や「自決」に使ったと思われる刃物、黒々とした何かの燃えかすがあり、それらに混じって死に追いやられた人々の遺骨の破片も茶色に変色して散在していた。懐中電灯に照らし出される残骸が、おんな・稚児のだれかれなく巻き込んだ戦争の無惨さと人々の無念を訴え、気持ちが重く沈んだことを思い出す。

米軍が最初に上陸した座間味島では沖縄戦を語っていただいた（坂西, 1990a, 坂西, 1990b, 坂西, 1990c, 図18)。座間味港までは那覇港から２時間弱の航路である。島はトカラ列島の一つであり、沖縄では珍しくハブのいない島だと聞いた。ライトブルーの美しい珊瑚の海からは、凄惨な戦争を想像することはできない。この淡青色の海が、かつて大砲と爆弾と機関銃で真っ赤に焼き尽くされたとは。清み切った清らかな目の前の海が、鮮血の海に一変したとは想像だにできなかった。それほど島は静かに落ち着き、自然は美しく蘇っていた。

艦砲射撃で島は吹き飛ばされ焼き尽くされた。「40年過ぎれば遠い昔のことですけれど、私たちあの戦火の中から生きのびて、40年過ぎてもあの当時の悲惨な傷跡は私たちの日々の生活の中で一日とて忘れることはございません」。宮城初恵さんの語りの一部を再録する。「忠魂碑前に集合

図18　沖縄戦の体験証言者の皆さん（1989年）

図19　座間味島の頂から見る島々（1989年）

ということで、『ああ玉砕か』と、…みんな晴れ着に着替えて、子どもたちも着替えさせて、集まっていった…照明弾が落とされあたり一面昼のようになりました。その次に…ものすごい艦砲射撃で、みんな死を覚悟していたんですけど、生への本能にもうみんな逃げていたわけなんですね。…敵のたまに撃たれたくない。自分たちで死ぬんだと…」。「敵の上陸とともにみんなあちらこちらで悲惨な集団自決が起こったわけでございます。…ある村の婦人が子どもたちを連れて逃げ回っていくときに、親戚同士が集まってネコイラズを飲んでいる場にあったらしいです。…この家族はネコイラズを持って壕の方へ逃げているようで、集まった子どもたち親戚に、チューブからこう出して右手の平において、嘗めては水を飲み嘗めては水を飲んで、これを繰り返していたようですが、なかなか死ねないで、ある子連れの婦人が『私たちにもください』とこう手を出しましたら、『あんたたちまでくれるのはないから』と断られたそうです」。

宮城さんの集団自決の生々しい語りは続いた。「先に飲んでいる婦人が、『おばさん飲まないで、苦しいよう、おばさん飲まないで』と、自分の苦しみを後から来た人には味わわせたくないという気持ちであったかわかりませんが、…とってももがき苦しんでいて、…それから早く死ねないというので、棒でお父さんが頭を叩いたり、カミソリで全部の喉をこう切ったらしいです。そのときに６歳だったと思いますが、その男の子が『こわいよ、こわいよ』と逃げていくところを掴んできて喉のところを切ったという、もう大変な惨事がこちらでは繰り広げられておりました」。至る所で同じ悲劇が繰り返された。湾の遙か先まで海面が見えないほどまでに、軍艦が埋め尽くした（図19）。船を飛び石伝いに渡り、島に上陸できるほどだったという。

戦争経験者も今では高齢化し、語り部の体験談を聴くことも難しくなってきた。「1989年の開館以来、戦争体験を語り伝えてきた元ひめゆり学徒隊の生存者たちが、『証言員』として修学旅行生を対象に、事前の予約を受けて行う館内での講話を2015年３月で終了する。戦後70年を前に、証言員の年齢が80代後半を迎え、人数も開館時の27人から９人に減少したことで証言員の体力に配慮した。４月以降は戦争体験のない学芸員や説明員が講話活動を引き継ぐ」（琉球新報，2014年10月４日）。私が初めて沖縄を訪れた年に、ひめゆり資料館が開館し、証言員の講話が始まったことを改めて知った。宮城さんの語りに悲惨な沖縄戦と戦争の過ちが象徴的に表されている。

その一方で、八重山諸島が太平洋戦争で戦場になり、住民がどれだけの犠牲を払ったのか何も知らないことに気づかされた。石垣島も本土決戦に備えて、空港や軍用施設の建設が急ピッチで進められていた。沖縄戦自体が、その場しのぎのものであった。本土決戦に備えた一時的な防波堤の役割を担わされていたといわれる。連合国軍が絶対的に優勢になる中、アメリカ軍は圧倒的な軍事力を集結して、大挙して八重山・沖縄に進攻してきた。沖縄で防戦している間に本土の守

りを固める、これが絶体絶命の窮地に陥った日本軍の作戦であった。沖縄は、「捨て石」であり、「本土決戦」のための時間稼ぎの戦闘を強いられたのである。敵を迎え撃つためには、戦闘に飛び立つ飛行場が、日本の最南端・最前線の石垣島にも必要だった。突貫工事が敢行され、労働には、老若男女、子どももかり出されたという（大城，2005）。

急ごしらえの軍用飛行場、その一つが石垣島に建設した対潜水艦の戦闘用の飛行場だ。大浜・平得（平喜名）飛行場建設には、主に朝鮮人労働者600人の労務の貢献が大きかった。彼らは発破による危険な工事に従事し、手作業で塹壕・陣地造りを行った。同時に、地元の児童・老人・女性まで動員し、さらに近隣の離島（小浜島等）から作業員を徴用し、1944年に完成させたという（太田，2014）。1944年10月９日には、沖縄本島500人の住民作業員が、帰島の際に遭難死した。

石垣島に「慰安所」があったことも知らなかった。最近、従軍慰安婦に関するかつての報道を誤報として朝日新聞が撤回し、波紋を呼んだ。済州（チェジュ）島で、慰安婦が強制連行されたという証言について、読者に対して、「虚偽だと判断し、記事を取り消します」としている（フジテレビ系・FNN，2014）。証言の真偽は兎も角、日本軍が「慰安所」を利用し、「慰安婦」問題があったことは否定できない事実である。石垣島でも「慰安所」が設けられていたと知った衝撃は大きい。従軍慰安所は、国外のアジアの植民地各地に配置されたとの誤った認識を持っていた。戦時中、中国大陸に進軍したことのある年配の人が「ピー屋」の話しをしていたのを思いだす。内地最南端の島々にも「慰安婦」を連れ歩いていたのである。背後で軍が関与していたといわれるが、慰安所の管理については不明とのことだ。石垣島の慰安所は、新築間もなく壊された八重山高等女学校の校舎の資材の一部を使って作られた。「慰安所」は、海軍警備隊本部近くに建てられた（太田，2014）。高校も壊され、まさに戦争は、市民を苦しめるものであり、救うものではないということである。

戦争マラリアと石垣島　八重山の戦禍、戦争被害は大きかった。沖縄本土とは異なり、住宅地や民家への大空襲は少なく、軍事施設や空港が爆撃された。それでも八重山全体では、爆撃、家屋の倒壊・消失などにより1,024戸もの被害が出たという。船の沈没などの犠牲者を含め、死者は178人にのぼった。

当時、南西諸島はマラリアが蔓延し、住民の生命を脅かす最大の病根だった。マラリアは、ハマダラ蚊が原虫を媒介し、刺されると人に感染する。熱帯マラリア、三日熱マラリア、卵形マラリアの四種類がある。マラリア防衛官吏・黒島直樹（八重山村登野城・現石垣市出身）は、マラリア撲滅に力を尽くした石垣島の地元民である。

軍部は、住民を山間部に「避難」させたり、有病地に「疎開」させたりし、多くの住民がマラ

図20　八重山戦争マラリア犠牲者慰霊碑

図21　波照間島マラリア犠牲者記念碑

リアに感染し命を落とした。波照間島の住民が、軍によってマラリア有病地の西表島に強制疎開させられ、多くの人が高熱と苦しみの中で息絶えた。これは、「戦争マラリア」の悲惨な事例の一つとして、軍の残酷な行為としてよく知られている。疎開先あるいは復員・帰島して後に亡くなった波照間島の人々は461人で、1,275人の全島民の36％以上にあたる（中田，2004）。波照間島だけの問題ではなかった。戦時中、マラリアに罹り亡くなった人々は膨大な数である。八重山諸島はマラリア汚染地であり、湿地や森には病原体を保有する蚊が生息し、住民の感染者は著しい数に上った。特効薬のキニーネは不足し、効果的な治療法もないまま高熱に冒され死んでいく人が多かった。石垣島には、八重山平和祈念館があり、住民のマラリヤとの苦闘と「戦争マラリア」の実態が記録･展示されている。資料には、戦時中に軍命によりマラリア有病地へ退去（強制避難）したときの経路図と各地の罹患・死亡者の人数が記されている。当時の石垣町と大浜村では、島内の南部海岸・平野部（石垣・登野城・川平・真栄里・大浜・宮良・白保等）から島中央部・山間部（白水、川良山、武名田原、仲水）に、北部地域（伊原間・平久保）から桴海に、竹富村は湯布島と西表島にそれぞれ強制移住させられた（八重山平和祈念館，2008）。各町村の死亡者数は1,388人（27％）、1,108人（24.81％）、785人（22％）で、与那国村は11.5％で、八重山地域の全人口31,701人中、罹患者は半数以上の16,884人、死者3,647人であった。現在、慰霊の碑が建てられている（図20）。

マラリアの猛威はすさまじかった。「（某女四十八歳）二十ノ時結婚シ六児ヲ挙ク。内三児ハ相共風土病ニ罹リ甲ハ生後二、三日ニ（其ノ母ハ偶々風土病ニ侵サレ強熱ヲ患ヒ居タリシト云フ）乙ハ生後二箇月目、丙ハ生後殆ド一年ニシテ、孰レモ死亡シタリ…（某女四十二歳）十九歳ニシテ結婚シ二十一歳ニシテ初産、八児ヲ挙ク内四人ハ（生後二十日ヨリ三歳ノ間ニ於テ）皆風土病ニ罹リテ死亡シタリ」。文部省が実施した風土病の調査結果の一部だ。調査結果は、「八重山群島風土病研究調査報告」に詳しくまとめられ文部大臣（西園寺公望）に報告されたという（南風原，2012）。

波照間島の島民が強制移住させられたのが西表島だ。西表島の干立村で、マラリアで多くの死者が出たことを、村人から聞いた。一次避難の後、安全確保のため二次避難ではみなさらに山奥に入った。湿気の多い山中ではマラリアが蔓延し、沢山の犠牲者がでた。家畜を島に残し、疎開した波照間島の住民は、食糧難にも見舞われた。牛馬は日本軍の食料用に強奪されたといわれ、それを指揮した山下（虎雄）軍曹（偽名）の残虐な行為は記念碑に刻まれ、今なお告発されている（図21）。碑文は軍曹山下の蛮行とその犠牲を記す。「太平洋戦争末期一九四五年四月八日西表島字南風見に強制疎開させられ全学童三二三名はマラリアの猖獗により全員罹患中四六人を死に至らしめた。かつてあった山下軍曹（偽名）の行為はゆるしはしようが、然し忘れはしない本校創立九〇周年を記念してはるか疎開地に刻まれた「忘勿石」を望む場所にその霊を慰めあわせて恒人平和を願い碑を建立する。　一九八四年七月一六年　波照間小学校創立九〇周年記念事業期成会」。

波照間島はマラリア汚染地ではなかった。軍の食糧を確保するために島民を西表島に「疎開」させたのが真相だといわれる。島には牛馬800頭、山羊1,700頭、鶏5,000羽がいた。それらは、鰹節工場で燻製にされたといわれる（南風原，2012）。軍隊が住民をガマ（避難壕）から追い出し、泣く子を「黙らせろ」と暴力を振るなど、戦時軍隊は庶民の味方にならなかったことを語り部の方から沖縄でよく聞いた。同じことが八重山諸島で起きていた。マラリアの怖さは、中国･南洋諸島･ガダルカナル戦に衛生兵として前線に従軍した父から子どもの頃に聞いた記憶がある。復員し山

間の寒村で貧農に従事した父は、しばらくの間農作業中にマラリアの後遺症が出て、体の震えが治まるまで家に入り寝ているしかなかったと話していた。「戦争マラリア」が、沖縄・八重山諸島に犠牲を強いたことは、戦争暴力の本質を表し、もう一つの沖縄戦だったことを改めて学んだ。

石垣島の戦後の開拓と若者の現在

石垣島の歴史は、先史時代にまで遡るほど古い。琉球王国成立後は、日本との関わりが強まり、社会的文化的に日本から大きな影響を受けてきた。とりわけ太平洋戦争後は、連合国・アメリカが沖縄を支配し、1972年まで本土復帰は果たせなかった。太平洋戦争・沖縄戦は、沖縄を日本でありながら「外国」にし、沖縄・先島諸島を根本から変化させた。

戦後石垣島の開拓が進んだ。太平洋戦争の影響が開拓の背景にあることを知ったのは最近である。先島諸島の開拓は、明治期以降継続的に進められてきたと思っていた。八重山諸島で農業・漁業が古くから営まれ、集落が形成されていたことは知っていた。石垣島北部には平久保村、中央・南部には新川村、真栄里村、平得村など諸村・集落があったからだ。

戦後の開拓移民　戦後戦地から復員・帰還した軍人や若者の仕事がなく、生活基盤を確保するために島々への開拓と移住の計画が進められたことは、全く知らなかった。石垣島、西表島など島々の各所に「開拓の碑」が建てられている。先ず一団の「先遣隊」が開拓に入り、原野を開墾した。亜熱帯の木々が生い茂る山野を切り開くのは、並大抵のことではない。当初は伐採したり、焼き払った土地に直に種をまいたり、苗木を植えたりしたようだ。開拓者には、沖縄本島から入植した人が多く、同じ地区の入植者でも出身地は様々だったようだ。明石の開拓碑には、大宜見村、矢部村、久志村、石川市、具志川村、美里村、越来村、北中城村、読谷村、玉城村、大浜町、さらに個人入植者２名の名前が刻字されている。開拓は入植者が協同で開墾し、ある程度農地が整備された段階で、「入植者同士で土地の区分けや配分を決める」、こうした協同作業を基本にする、これが私の「開拓」に対するイメージであった。ところが、地元の人に聞くと、各自の開拓地は決まっており、各戸が配分され所有した土地を開墾し、甘藷や陸稲を焼き払っただけの畑や木の切り株の間で育てたという。

開拓・移民には、各地の独自の事情があるにせよ、共通した時代背景・社会状況があった。沖縄本島大宜見村からの移民で開拓が進んだ石垣島星野の開拓の歴史が、当時の様子を教えてくれる（人魚の里・星野，2014)。「星野の歴史は石垣島北部の移民の歴史でもあります。石垣島では移民の先頭を切って昭和25年３月16日に沖縄本島の大宜味村から新天地を求めて入植しました。それを頼って毎年のように次々と各部落が移民してきました。戦争で焼土と化した沖縄、戦禍が収まると人々は各自のふるさとに引き揚げましたが、帰るところのない難民たちがまだ多数残っており、復員軍人や疎開者、また南方諸島からの出稼ぎ移民が続々と帰ってきました。もともと土地に恵まれない大宜味村では国内・海外の出稼ぎ移民からの送金によって生活を維持してきた移民経済の村だったので、戦争によって多くの犠牲者を出し、財産をなくし強制送還させられてきた移民の人たちは親類縁者から借りたわずかな山地にイモを植え、また米軍からの配給物資で細々と暮らしていました。アメリカ軍、民政府共同による八重山開発計画が発表され石垣島と西表島に３万人を移住させ、土地と、農具、家畜等を与え、当初は食料の世話もする、その前にマラリヤの撲滅も行う計画というものでした」。計画移民は頓挫し、自由移民に切り替わったという。

食べ物も十分になく、飢えをどうやって凌いだのか、先遣隊の苦労を想像することは難しい。

図22 「平野開拓団」

図23 開拓者

図24「明石開拓団」

図25 入植記念碑

生活の見通しがついた頃に、家族を迎え入れた。厳しい労働から、体調を壊し、開拓を断念する人もいたと聞いた。平野、明石、崎枝、星野、於茂登、各地に開拓を記念した碑が建立されている（図22，図24，図25）。図25は西表島の住吉に建つ記念碑である。碑には「昭和二十二年十月十一日」とあり、戦後の厳しい状況が刻まれている。「第二次世界大戦による郷土の荒廃と食糧難はその極に達し、復員・引揚者の職もなく、混沌たる世相であった。時の宮古民政府は、宮古島での公共施設・住宅等の建設資材を獲得するため伐採隊を派遣し、併せて食糧補給隊として当地区守奈船崎一九番地の利用権を得て、こ々に開拓隊を入植せしめた。その後琉球政府でも八重山各地に計画移民を行ったが、住吉部落はそのはじまりであった。マラリヤやジャングルと戦って住吉部落の基礎を作った開拓隊員の名を印して記念とする」。昭和22年入植と書かれ、八重山の戦後最初期の開拓地だった。沖縄本島以外の島々からも多くの人々が西表島などに開拓移民したことがわかる。

石垣島の平野、於茂登などの開拓地は島の中心部からは遠く、交通の便は悪かった。「息子２人は農業を継いではいないが、市内で農業関連の仕事や研究、試験場業務に就いている。将来、子どものためにシークワーサーを植えているところだよ」、と沖縄本島から入植したという地元の年配の方が話してくれた。足下を見ると、彼は裸足だった（図23）。平久保集落の80歳を超えるおばあさんは、「昔は食べ物もお金も何もなく、船で町まで薪を売りに行って生活の資金にしていた。静かでよいところだけど、ここには新しい情報が入りにくく、それが嫌だった」と当時を振り返る。

「移民」から今年（2014年）で60周年を迎える明石の集落では、記念のエイサー祭りが行われた。開拓団の記念碑にも刻まれているが、開墾当時村人の出身地が異なり（読谷村、大宜味村、玉城村、山原、島尻、等々）、踊るエーサーにも違いがあった。ラジオもテレビもなく、仕事を終え広場で皆で泡盛を酌み交わし、故郷を思い出し語り合う、これが一番のくつろぎだった。入植三年後の昭和33年に青年会を中心に始めたのがエーサーだった（八重山毎日新聞，2014年）。今、開拓先駆者時代から子どもの代へと石垣島は新時代に移行している。

石垣島の農業は農地が広く、トラクターなどを用いた作業が中心で、機械化が進んでいる。大規模農業である。「石垣牛」の名で知られる肉牛の飼育も盛んだ。牧畜・牧場の規模は大きく、大規模経営である。肉牛の大規模飼育は、最近のことで、開拓当時は今のように盛んではなかったと地元農家の人に伺った。ただ、石垣島では、琉球王国の時代から、牛馬、山羊などの家畜の飼育は行われていたようだ。平得村史によれば、18世紀には地域に有力支配者がいて牛数百頭を飼育していた。牛は海外との交易品だったと推測されているが詳細は不明だという。

現在、「石垣牛」は、JAのブランド品だ。しかし、牧畜、農業が盛んとはいえ、家業を継承しない若者もいる。一方で、ゴーヤ、ドラゴンフルーツ、パイン等、特産品が広々とした農地やビニールハウスで栽培されているにもかかわらずだ。伊原間近くの宮良さん（仮名）は60代後半だ。高

校卒業後東京に出て自営業を営んだ。事業が思うに任せなくなり、石垣に帰郷した。両親は、開拓後に自由入植したという。周囲には、ハウスが破れむき出しの鉄骨、伸び放題の草で荒れ地化した農地が散在する。後継者がいないのだ。石垣島民に限らず、「一旦島を出たら、若いもんは戻ってこないよ」、「若い頃は都会に憧れるからね」と言う人が多い。島を離れる若者が多いということだ。漁業も同様で、観光産業化しているところもあるようだ。

JAおきなわ八重山地区畜産振興センターの肥育部会が、牛を飼育している。「現在の部会員は22名と設立当初からほぼ半減しているが、それだけでなく高齢化が進んでいる。平均年齢は48歳であるが、70代が２名、40～60歳代が15名、30歳代が４名という構造である。このように、石垣牛の担い手が量だけでなく若手の補充という質的側面も不足していることは、今後の石垣牛のブランド維持・拡大にとって大きな課題を投げかけている」（福田，2011）。TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）が進められる中、農業後継者の不足が深刻な問題になりつつある。

石垣島の子ども・青少年　人口は、約4.5万人で推移している。男性の人口が増加しているが、大きな変動はない（図26）。2012年４月以降の男性の増加が大きく、女性人口を初めて上回った。翌年３月７日の新空港開港が影響しているのか。尖閣諸島の防衛のため海上保安庁の石垣港の警

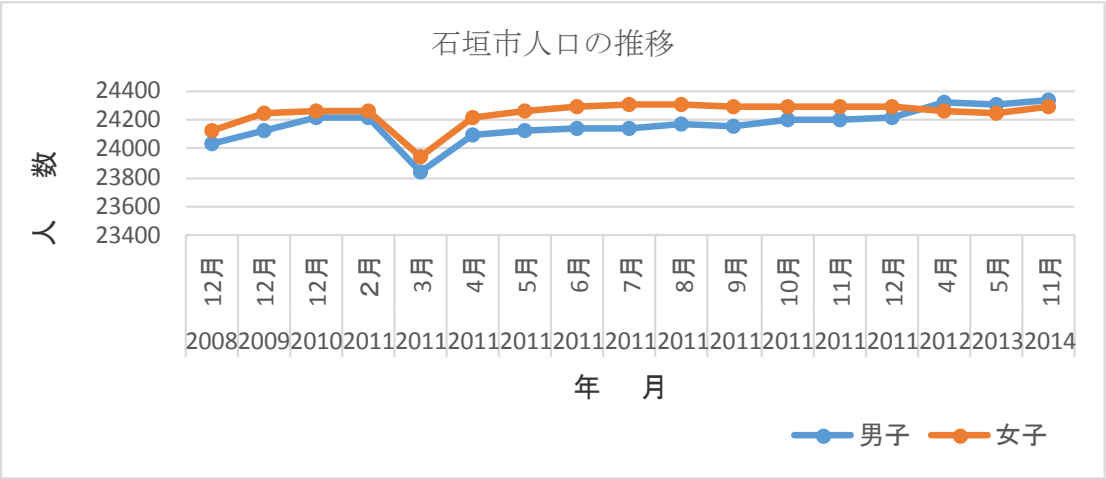

図26　石垣市の人口の年次推移（2011年は２月～12月）

備強化が図られ、300人規模の派遣があった。「保安庁職員の宿舎が足りない」、と不動産業者（石垣市・S商事）は話していた。最近の人口増には、その影響が出ているのかも知れない。

表１は、市立小学校の学年別学級数・児童数の一覧（小学１年生の学級数の少ない順に配列）である。学級数が0.5となっているところは、複式学級である。市街地の学校（表中宮良～平真）に子どもが集まる傾向がある。崎枝の景勝地にあるレストランに勤務する女性は、市内に住居を借りて住んでいる。「小学校までは周辺部のよい環境で子どもを育てたいと親は思うが、一方で習いごとや中学校、高校への進学を考え中心部の学校に子どもを通わせる」という。郊外の学校では、仲間と関わり合う機会がなくなる問題もあるという。幼稚園・小学校・中学校を同じ敷地内に設置する学校も周辺校では多い（図27）。密度の濃い、対面授業ができ、行き届いた教育環境は大きな利点である。他方で、周辺地の過疎化は深刻だ。新空港に近い白保地区は、市街地にも近く地理的にも自然環境においても居住には好適地であるが、小学校の学級数は各学年１学級で、子どもの数は一クラス20人前後とやや少ない。低学年ほど児童数は多くなっているが、新空港開港による市街地化の表れかも知れない。白保地域は、石垣市役所がある市の中心部からバスで30分程度

表１　小学校別学年別学級数および児童数

平成24年５月１日現在

区分	１学年		２学年		３学年		４学年		５学年		６学年		特別支援学級	
	学級数	計	学級数	計	学級数	計	学級数	計	学級数	計	学級数	計	学級数	生徒数
富　野	0.5	2	0.5	3	0.5	4	0.5	0	1	4	0	0	0	0
吉　原	0.5	3	0	0	0.5	3	0	0	0.5	3	0.5	1	0	0
崎　枝	0.5	2	0.5	1	0.5	3	0.5	2	0.5	3	0.5	2	0	0
川　原	0.5	3	0.5	4	0.5	1	0.5	3	0	0	0.5	4	1	2
大　本	0.5	1	0.5	4	0.5	1	0.5	1	0.5	4	0.5	3	0	0
明　石	0.5	3	0.5	4	0.5	2	0.5	1	0.5	4	0.5	3	0	0
平久保	0.5	1	0.5	1	0	0	0.5	1	0.5	3	0.5	1	0	0
宮　良	1	23	1	21	1	22	1	17	1	16	1	21	1	2
名　蔵	1	7	1	7	0.5	3	0.5	3	0.5	4	0.5	7	1	3
白　保	1	25	1	16	1	22	1	22	1	14	1	18	0	0
石　垣	2	53	2	60	2	41	2	59	2	63	2	67	1	3
大　浜	2	52	2	48	2	55	2	54	2	54	2	49	2	9
八　島	2	53	2	37	2	48	1	40	2	51	2	54	1	3
真喜良	2	53	2	50	2	50	2	61	2	54	2	57	1	6
新　川	3	74	3	90	2	52	2	59	2	64	3	84	1	5
登野城	3	86	3	83	3	93	2	78	3	93	3	84	1	6
平　真	4	102	5	122	3	92	3	86	3	93	3	88	1	7
計	27.5	558	28	578	23	502	21	499	23.5	542	24	557	12	46

（単位：クラス、人）　　資料：平成24年度学校基本調査

の位置で、この地域が人口を現状維持できる境界かもしれない。これ以上郊外になると、仕事と子育ての両立、学習機会の確保が困難になるからだ。

於茂登トンネルを抜け、石垣港とは反対の海岸線にある富野集落出身の40歳代の女性は、「郊外の遠隔地は、集落を維持するのが難しくなっている」と話す。彼女の弟は、地元で農業を営んでいるが、定住する若者の数は減少しているという。「子どもが少なく、集団的な授業ができない。私も大勢でやる授業の経験がなく、今でもみんなでやる競技などは苦手」と彼女は話す。市は、市営住宅を建設し住宅確保の支援をしている。住宅には、住民の子が入居することが多いようだ。明石（３戸，以下概数）・名蔵（10戸）・崎枝（５戸）にも市営住宅が造られている。多くの場合は、若い夫婦を対象にした賃貸住宅であり、地域の若者人口確保・児童数の維持が目的である。

図27　名蔵幼稚園・小学校・中学校

図28　西表島・校庭でスケッチをする子

「内地」からの移住者もいるが、児童数減の解消には至っていない（図28）。新空港開港で交通の便が良くなり、移住者が増えていると聞く。今後働く場が確保されれば、若者の島への定着が促進され、事態は好転するかもしれない。「景気の好転を反映しているのか、不動産の売買が最近活発化している」と前述の不動産業者（石垣市・S商事）は話していた。

石垣島には高校が３校ある（八重山農林高校・八重山高校・八重山商工高校）が、沖縄本島の高校に進学する生徒も多い。西表島の陶芸家に伺ったところでは、やはり若者の離島は多いそうだ。彼の二人の子どもも内地の大学に進んだという。西表島は竹富町に属するが、竹富町の町役場は石垣島にある。役場職員は、みな住民票を石垣市に移し石垣市民になっているとのことである。別の自治体に住民票を持つ人が、町を運営する。形式的な住民登録かも知れないが、これには驚いた。「島に町役場を置けば、職員は島に住み、若者の数も増えるのにね」、冗談交じりに笑顔で話すことばが耳に強く残っている。町役場が石垣島にあるのは、他の離島から島民が竹富島に行くことは少なく、仕事や日用品の調達・観光や経済活動などは石垣島を中心に行われていることと深く関わっているからであろう。

さらに、厳しいことばが続いた。「公務員を退職した後、島を離れて沖縄本島や石垣島に住居を構える人が少なくない」と、彼は苦笑した。子どもが、生活を築く島外の地だからであろうか。地元に育ち、生活が安定し、地域振興に尽力した自治体職員が、退職後郷里を離れることを不思議に思った。なぜ、という思いを強く持った。若者に限らず年配の離島者が多いということである。

石垣青年の活動　石垣市は、各地域の青年会（団）活動が盛んである。今、石垣市青年団協議会（1980年結成）は、歴代初の女性会長がリーダーである。沖縄県青年団協議会に加盟し、全国青年団協議会の構成メンバーでもある。毎年市民会館で青年文化祭が開催される。今年は10月４

図29　団の活動…ソフト…

図30　青年文化祭

図31　伝統舞踊、創作劇…

日に開かれ、第28回を迎えた。八重山諸島は伝統舞踊･芸能の宝庫といわれ、彼らもそれらの継承、掘り起こしに力を入れている。

文化祭でも舞踊の演目は多い。約1,000人入る大ホールは年配者から子ども連れのお母さん、若者でほぼ満席になる。市の青年会は、「いしゃなぎら青年会」、「双葉青年会」、「登野城青年会」、「平得青年会」、「大浜青年会」、「宮良青年会」、「白保青年会」の７団体から構成される。今年は、沖縄本島南城市の大城青年会、さらに６年ぶりに与那国青年会が友情出演し祭りを盛り上げた（図29，図30，図31）。

戦後の島の復興には青年会が、大きな役割を果たした。「次々と帰郷、復員してくる若者たちは将来への希望を託して青年団を結成していた。…甘藷を植付け…スポーツ競技等、行事計画も意欲的であった。…文化部は敗戦のショックから速やかに立ち直るための諸活動をする必要があっ

た。…討論会を開いたり、弁論大会の開催、郷土文化の伝承として、ユンタ、ジラバの学習、演劇舞踊は言うに及ばず、…レクリエーション活動等は特に団員から評判は良かった。…民主主義の学習会もかなりした」。登野城の当時19歳だった少年期の青年会活動の回想である（石垣市史編集室，1985, p.148）。今の青年会活動の原型が語られている。エイサーを踊り、バレーボール、ソフト、ボーリング等を楽しみ、キャンプ、クリスマス・サンタで子どもと交流する。各地の青年が、地域に密着した活動を生み出している。若者の地域活動は、全国的に見ると著しく衰退している。その中で、沖縄、八重山諸島・石垣市の若者が生き生きと若者文化を作り出す原動力は、人と人の結びつきがあること、集落・地域が維持され存続していることにある。琉球文化の粋である。白保など歴史の古い地域では、毎月伝統行事があるといわれるほど地域活動が盛んだ。

他方で、青年会に入らない青年も多い。彼らは、どのような日常を過ごしているのか、興味深い。島内に観光、遊行の場、娯楽施設はあるが、文化・教育施設が多くあるわけではない。少なからぬ青年が、進学を契機に島を離れ、容易に帰郷しない。島の青年の日常をさらに知りたい。

若者の労働環境　11月に日本青年館で全国青年大会が開催された。全国の勤労青年・地域に生きる青年の文化の祭典といわれてきた大会だ。文化・芸能・スポーツ、あらゆる種目が揃う大会だった。過去形で表現したのは、近年参加する青年がめっきり少なくなり、開催種目が激減しているからだ。祭典期間は週末とはいえ、３日間も４日間も長く休みが取れない、旅費の工面が厳しい等々、若者に余裕がなく、参加が難しくなっているのだ。

2014年10月24日、沖縄県の最低賃金が677円になった（沖縄県，2014年11月14日付広報）。従来よりも13円引き上げられた。ホールスタッフ、キッチンスタッフ、接客、陶器製造補助、レンタカー従業員、建設作業員、お土産販売などの職種で募集がある。市内で「アルバイト」採用の張り紙を見ると、最低賃金より若干高く、時給700円から750円前後が多いようだ。技術者（型枠工・鉄筋工）などは900円から1,500円と時給は高い。西表島で募集されていたパートの介護職員は、フルタイムで日給4,000～5,400円である。有資格技術者募集では、月給21万円とある。地域により物価水準が異なり、時給に違いがあることはわかるが、現在の賃金水準では若者の生活は困難だ。先の介護職のケースでは、20日働いて税込みで約11万円である。賃貸料、食費、生活費すべてを賄うなら、大都市圏で自活することは極めて厳しい。

石垣島では、石垣新空港ができ、海外や島外からの渡航の便がよくなった。今後、観光客や移住者の増加が促進され、人々の往来が盛んになる可能性がある。地元の不動産業（石垣市・S商事）の人の話では、最近物件の動きが活発になり、外資系の資本も入り始めたという（例えば、台湾・中国の資本など）。石垣島は、都市化し便利になるが、一方で物価が上がり、若者の生活は必ずしも楽にはならないかも知れない。若者の給与生活者が増える中で、アパート住まいの若者も少なくない。最低賃金が上がったとはいえ、島の陸路・空路の交通が発達するに伴い物価が上がり、さらに消費税増税がのしかかる。2007年に沖縄本島の青年の地域活動を調査したときの時給は618円だった。八重山諸島でパートやアルバイトの募集を見る限りでは、若者が賃貸住宅を借りて自活するのはかなり困難だ。2007年に沖縄本島で地元青年会の若者に生活と活動を聞いたとき、アルミサッシ製造の仕事に従事している正社員の山城さん（26歳・仮名）が、「俺なんか15万だよ」と言っていたのを思いだす。

沖縄県の雇用状況は依然として厳しい。しかし、彼らは「選り好みしなければ食っていける」とくったくがなかった。沖縄の最低賃金が７年前の618円から677円に変わっても似た事情にあることは理解できよう。「自分の収入だけでアパートを借りて自活するのは苦しく、結婚して同居して

二人で生活するなら何とかやっていけるくらいだ」、今もこのことばは生きている。とはいえ、島嶼の魅力は大きい。沖縄本島や石垣島では、通勤時間は車で30、40分以内がほとんどだ。沖縄本島も石垣島も縦には長いが、横幅が狭いからうなずける通勤時間だ。島には経済面だけでは計りきれない、人間同士の密度の濃いつながりと豊かな美しい自然がある。これらは、若者にとって何にも代えがたい魅力になっているのだ。

農業・畜産業　石垣島の農畜産業、観光業、漁業（図34）、窯業（図35）等、若者の就労について筆者の個人的な印象に基づいて考察しよう。島を一周すると、一見して大規模営農であることがわかる。サトウキビ畑、パイン畑、放牧場は最もよく目にする光景だ。月桃、マンゴー、ドラゴンフルーツ、ゴーヤなどは、ビニールハウスで大規模に栽培されている。マンゴーは、高級な果物として人気があり、果物農家の大きな収入源になっている。名蔵でマンゴーをビニールハウスで栽培する男性は、全国各地から受注し、産地直送している。息子二人が、農業を継いでいるという。於茂登の集落では、「若い人が、新しくマンゴーの栽培を始め、大きな収入を得ているよ。初め親は、無理だからと果樹栽培に反対していた」、と若者の新規就農者がいることを伺った。

広い畑にスプリンクラーが回転し、自動散水している。肥料（液肥にしているのであろう）もこの散水機で撒くのだと聞き、驚くと共に省力化の工夫だと感心し納得した。有機栽培を謳う生産者もいるが、多くの場合「牛糞」を畑に敷き込み「有機」化していると思われる。JAの肥料センターが、「堆肥」を製造し、農家や市民によく利用されているようだ。作物の天敵は雑草で、農作物をすぐに覆い隠し衰弱させる。無農薬栽培は無理だという。特に葉物は、出荷に手間がかかり、虫に喰われやすく、「虫食い」は商品価値がなくなってしまう。無農薬栽培を目指しても、近隣の農薬散布で飛散した農薬が降りかかる。大規模農業も維持・管理に多大の労力を必要とする。明石では、農業後継者がいなくて、ビニールハウスが骨組みだけを残して、雑草の中に建っていた。開拓民で90歳のおじいさんが切り盛りしていたが、「転んで骨折してから、農地が荒れてしまった。息子さんはいるが、よそで働いているよ」、退職後横浜からUターンした大城さん（64歳）が話してくれた(仮名)。大城さんも親の代では農業を営んだ。しかし、彼は高校進学を契機に島を離れた。新規就農者がいる一方で、親の代で農地を切り開いた農家で、若者の農業離れが進んでいる。

石垣島では畜産も盛んである。「石垣牛」としてJAが飼育を「定義」し、ブランド化している。市内の飲食店には「石垣牛」のステッカーが貼られた店が多い。20箇月以上、決められた飼料と管理の下で飼育された牛だけが「石垣牛」になるのだ。島の至る所に牧場があり、沢山の牛が草を食んでいる。それに対して、養豚場・養鶏場は見かけることはほとんどない。「石垣の豚」・「島の鶏」も耳にするし、それらを提供する専門の「グルメ」もある。養豚場は崎枝にあったが、沖縄特産の「アグー豚」ではなかった。大規模な飼育場であった。個別ケージに一頭ずつ入れられ、餌を食べる以外は全く身動きできない。養鶏場の鶏が、一羽ずつ仕切られたケージに入れられ餌をついばむ以外、体の向きを変えることもできないのと同じだ。食肉用飼育とはいえ、むごい環境に置かれていると思った。島の特産はアグー豚であり、飼育方法は一般の豚とは異なるのかも知れない。山羊も所々で飼育されている。「山羊汁」は島の珍品の一つである。提供される食堂はかなり限定されている。やはり、石垣島では、肉牛の肥育と消費が主流のようだ。

石垣牛の畜産に従事する若者は減少傾向にあり、従事者の高齢化が懸念されている。既に述べたが、30歳代の石垣牛肥育部会の会員は２名である。いくつかの牧場では、牛の世話をする若者の姿があったが、「石垣牛」ブランドを育成する農場ではないかも知れない。TPP等農産物の自由化が進むと、農家・畜産家は、品質は兎も角価格競争のみを強いられ、経営危機に陥る危険が大

きくなると危惧する。そうなれば、島、ひいては日本の食糧自給はますます難しくなると感じた。一次産業を担う若者の仕事も従事者も減少してしまうのである。

漁業・陶芸　島には、魚市場がなく、市民が直接新鮮な魚介類・海産物に触れる場はない。石垣漁港があり、かつては近くに魚市場があったが、今はない。マグロ・グルクン・マチ・イラブッチャなど魚の種類は豊富だが（図32)、特定の鮮魚店・スーパー以外では切り身にしていない丸ごとの魚は取り扱っていないので、市民が手に入れることは難しい。意外に思うかもしれないが、陶芸・焼き物も八重山諸島では盛んだ（図33)。窯業については、後に触れる。

図32　島一番の鮮魚店と「イラブッチャ」

図33　与那国・山口窯二代目

魚介・海産物は島の特産品だ。「海ぶどう」や「もずく」の養殖が行われ、名蔵湾では天然塩の製造等が行われている。各地の民宿では、店主が自ら漁に出るところもある。伊野田にも漁港があるが、若者が漁業にどのくらい関わっているか不明だ。民宿などでは、経営者の「主人」が、漁に出て魚や貝を採ってくるそうだ。実際に、夕方、白保の海岸を歩いていると、タイらしき魚を砂浜でさばき、内蔵を取り出している人がいた。内臓を抜いた魚を海水で洗って、たらいに入れていく。５、６匹はいたから、民宿を経営している人が、宿泊客の食卓に載せるために釣り上げたのだろうと想像した。漁業権を得て、個人で漁をしている人が多いのであろう。白保地区の案内には、昔から「半農半漁」を営んできたと記されている。観光案内でも、「民宿の主人がその日に漁をし、とれたものが食卓に出されるので、お楽しみに」とあるなど（干立村)、自然に恵まれている。明石地区でも、バス停の前に地域の共同売店があり、農作物だけでなく、地元漁師により鮮魚が提供される。市場化されていない、地域密着の商品交換が今でも存在しているのだ。石垣市内でも無人の売店・スタンドがあり、パパイヤ・トマト・冬瓜・長命草・野菜などが陳列されている。品物が欲しい人は、集金箱に代金を納めることで商品を自由に手にすることができる。売り手と買い手の完全な信頼関係で成立している経済関係だ。奈良の農村部、首都圏の埼玉でも見かけ、石垣島に限らない光景かもしれないが、今時貴重だと思う。

漁法にも手網漁、巻き網漁、追い込み漁、釣り、等々色々な方法がある。石垣島では、「半農半漁」の自然に依存する生活が営まれてきた。白保地区の白保サンゴセンター「白保サンゴ村」に行くと、実物の船が展示され、魚の種類に応じた独特の漁の仕方が写真と共に説明されていて、当時の生活を自分で体験しているかのように直感的に理解できる。センターでは、毎週日曜日に「白保日曜市」が開かれ、地元の農畜産物・自然素材を使った産品・食品・工芸品が提供され、地域住民の「プチ・交流広場」になっている。月桃の葉にご飯を包んだおにぎり、自家飼育の牛肉の販売、ニンジン・タマネギ・インゲン豆・大根・ピーマン・パパイヤ、等々の農産物、地元産の麻（苧麻）を使った小物、月桃を純素材にした芳香液、地域の自然を生かした手作りの品物が並ぶ、素朴な

魅力をもつ市民の手製市だ。市は、幼児、小学生、中学生からお年寄りまで訪れ、飲み物やおにぎり・軽食を味わいながら楽しんでいる。若者、とりわけ女性が、自家栽培品や手作り食品を提供し、生き生きと活動している交流広場である。

観光業と若者　島では、なんといっても観光産業が基盤を成している。近隣の島々を結ぶ定期船、観光船が運航されている。与那国島、沖縄本島等との往来は航空機が利用される。自営観光業が盛んで、ダイビングスクール、川クルーズ、トレッキングなどメニューも多い（図34）。石垣市内の商店や自営業者は、沖縄本島や他の島から渡って来た人たちが多いと聞いた。波照間島、西表島などでは、結婚して島に来たと話す女性も多かった。八重山の島々には、陶芸家が多い（図35）。昨年（2014年11月）も石垣市市民会館で「石垣陶器祭り」が開催された。来客数と参加陶芸家数は、年によって異なると思われるが、今年は15人ほどの陶芸家が出店していた。

図34　河川クルーズ

図35　陶芸祭参加者表

図36　新石垣空港

図37　島唄ライブの酒場

陶器専門店の女将は、「30以上ある窯・陶芸家のうち古くからある石垣島の窯業家は一人でしょう」と話してくれた。陶芸家に伺うと、地元の土を利用して独特の陶器製品を作り出している人が少なくないようだ。八重山の各島には、全国各地から島々の独自の魅力に惹かれて移住した人が多いことを物語っている。しかし、定職を得ることが容易ではない島で、若者が生活するのはたやすいことではない。沖縄移住「ブーム」、石垣島人気が2,000年以降に起こったが、その後下火になり現在に至っているという。地元育ちの若者が、高校進学を契機に郷里の島々を離れ、島外の人々が南西諸島に「終の棲家」を求め移住する（図36）、見方によっては皮肉な現実である。

地元石垣島の陶芸職人は少なく、ほとんどが本土や島外から移り住んだ人たちだと聞いた。驚きもあったが、納得する部分もある。与那国島の山口窯（図33）の創始は、30年前に笠間で修行した陶芸家による。今回「石垣陶器祭り」に出展し、会場で切り盛りしていたのは第２代目だ。彼は、「内地」のデザイン関係の大学に進み、卒業後工芸の専門学校に進んだという。就職を決める年に3.11が襲った。彼は進路に迷ったという。そのとき、陶芸家の両親が、与那国で「山口窯」を継承することを勧め、陶芸の道に入ったと語っていた。沖縄県、八重山諸島は、歌、舞踊など伝統文化が豊かで（図37）、若者を惹きつける力を持つ。「琉球」には、日本文化にない「創造的自由」があるからではないだろうか。

おわりに

常夏の島石垣、そんなイメージが吹き飛んだ。冬場は、15度前後の日々が続く。肌寒いくらいだ。冬期はマリンスポーツもお客が少なく、インストラクターには集配業務など他の仕事で生計を立てる人もいる。野菜などの農作物も、季節によって店頭に並ぶ種類が変わる。市内には、JA直売所「ゆらていく」があり、新鮮な農作物・青果が並ぶ。参加農家は、基本会費を払い、自家製の野菜や青果を店頭に自由に並べる（図38）。観光客の姿も多い。直売所の向かいには、評判の高い「りょ

うこ鮮魚店」（写真39）がある。島で獲れる新鮮な魚をその場で捌いてくれる。魚は市場で仕入れるが、直接自分で釣った魚を持ち込む馴染みの「漁師」もいる。海の幸、山の幸に恵まれている島を象徴している。

図38　「ゆらていく」

図39　「りょうこ鮮魚店」

図40　マンゴー園

図41　島バナナ

米や粟は昔から島で栽培されていたが、「コシヒカリ」の作付けを福島の農業指導員から受け、石垣島の米の品質向上の契機になったという。1990年代に、内地の冷害で不作が深刻になり、岩手県（東北全体だったという）が、年間を通じて暖かい石垣島に「種籾」（かけはし）・「苗」の確保・育成を依頼し、作付けの指導を行った。これを機に石垣島の稲作が、一新されたという（いわて純情米需要拡大推進協議会，2015）。トロピカル・フルーツが豊富な島、石垣島。パイナップル、マンゴー（図40）、島バナナ（図41）、パッションフルーツ、パパイア、グアバ、果物の種類は豊富だ。「カニステル」、［蟹も食べない果物だから］面白い名がついたと聞いた。真偽は怪しい。マンゴーは、高級フルーツとして栽培される。パイナップルはポピュラーだが、島に移入された経緯には戦争が絡んでいる。このことは一般に知られているのだろうか。1895年台湾は日本の領土とされ、八重山諸島と台湾の国境はなくなった。台湾の人々が、沖縄・石垣島に活路を見いだすために移り住んだ。食糧としてパイナップルを持ち込んだのが始まりの一つだ（松田，2004）。八重山の農業には、太平洋戦争が影を落としているのだ。

それにしても、農業後継者は減少している。労働の厳しさと、収入が十分に得られないからであろうか。沖縄県、石垣島の労働環境は悪い。内閣府の報告で石垣市は次のように指摘されているくらいだ。「一人あたりの平均県民所得は最低である。完全失業率は7.1％（平成23年）と高い上に、30歳未満の完全失業率は12％とさらに高い。ひとり親世帯、特に母子世帯が子育てのために仕事の内容や時間が制約される状況で臨時やパート等の働き方を選ばざるを得ない、またダブルワーク等で働いているのに貧困という深刻な状況がある。このことは家庭の教育力の低下を招いており、不登校児童・生徒に対しては家庭を含めた支援が必要となっている」（内閣府，2014,

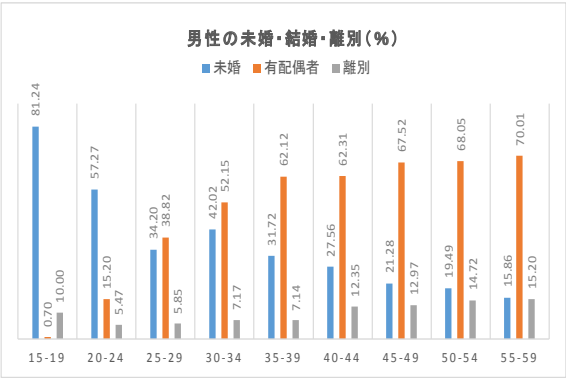

図42　石垣島の婚姻率（男性）

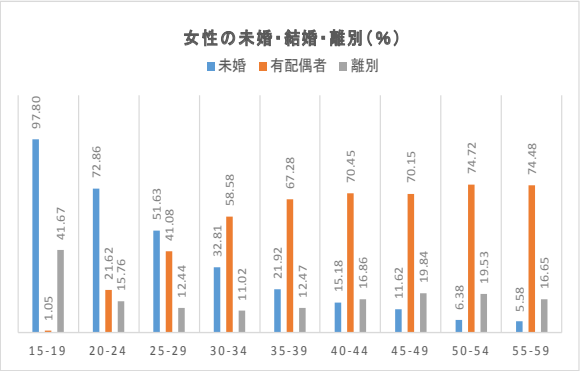

図43　石垣島の婚姻率（女性）

p.142)。こうした事情と関係するかは不明であるが、石垣市の離婚率は全国でもトップクラスだ(図42, 図43)。空港に近い小学校に通う小学生は、「到達度学習で、毎日授業が終わったあとで残って勉強するから大変だよ」といっていた。「沖縄県は、全国学力テストで成績が良くなかったから、去年は頑張って順位が上がったんだって。伸びた成績をぼくたちが下げちゃいけないし、もっと上げたいから」、「だから、たいへんなんだ」と。表からは見えない島の厳しい現実がある。

魚介類は天然資源として貴重である。「魚あります」、地域の食堂のメニューだ。地元の直売所や食堂、食料品店では地元民（図44）が捕った魚が店先で売られている。自然は実に巧みだ。場所によって棲息する生き物が違う。例えば、明石は島のくびれの部分に位置し、島の幅は300mもないくらいだ。わずかの距離で、太平洋側と日本海側では浜辺で見る魚介類が全く異なる。一方の浜では、引き潮になるとオオヤドカリ（図45)、シオマネキ（図46）が動き回るが、他方の浜で

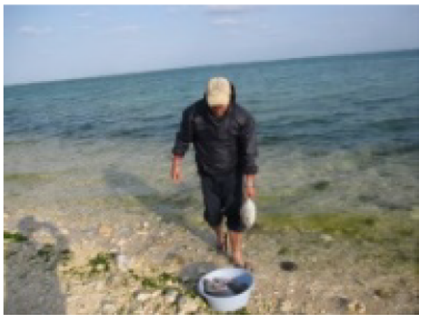
図44　浜で魚を捌く人

図45　オオヤドカリ

図46　ヒメシオマネキ

は一匹も見られないのだ。ハブ（図47)、オオゴマダラ（図48）等、沖縄にしかいない動物・昆虫も多い。沖縄固有の植物、野花も多い（安里，2013)。肥沃な山野から栄養分がサンゴの海に供

図47　ハブ

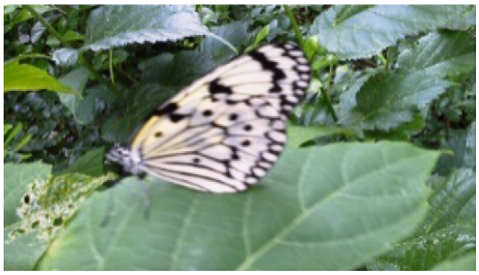
図48　オオゴマダラ

図49　浜に打ち上げられたサンゴ

給される。豊かな自然の中で南西諸島は育まれている。しかし、花に集まる蜜蜂や蝶など昆虫は、滅多に見かけない。緑豊かな牧草地が広がるフランスの田舎で、蝶やミツバチを見ることは少なかった事を思い出す。島の開発、農地の開拓、宅地化が進む中で、野山の生き物が減少しているのではないかと心配になる。

先島・八重山は、サンゴの海に浮かぶ島々だ。石垣島の海岸は大小様々の珊瑚が砂浜を埋めている（図49)。とくに白保の海は珊瑚が豊富で、保護に力を入れている。サンゴ礁保護研究センター「しらほサンゴ村」(WWK・世界自然保護基金ジャパン，図50）が、活動拠点だ。「しらほサンゴ村新聞」を発行して、広報・啓発活動を行っている。地域の生活・工芸・食品・産物を知らせ交流を促すことも一つの活動で、「白保日曜市」も開かれている。他にも「海の中の清掃活動」(八重山マリンレジャー事業協同組合)、「わくわくサンゴ石垣島」(サンゴ養殖研究班・魚湧く海保全協議会・沿岸レジャー安全協議会・沖縄エコツーリズム推進協議会）等、自然・環境保護が進め

図50 「白保サンゴ村」

図51 浜辺に散乱するゴミ（竹富島）

図52 人頭税廃止記念碑

られている。しかし、島々の自然環境の衰退・衰弱は確実に進んでいる。都市化と地域の開発が最も大きな要因の一つであろう。赤土が海に流れ込むことで、海洋の汚濁が進み、珊瑚礁が死滅してしまう。地区によっては、畑の表土が流出するのを防ぐ取り組み・運動をしている。ゴミの散乱・漂着も深刻だ。中国・台湾と近く、浜に打ち上げられたゴミを見ると、中国文字を読み取ることができる（図51）。ハングル文字は見かけなかったが、隣国との距離と海流の違いが漂着に影響していると考えられる。環境問題は、一国を超え地球全体の問題であることを示している。

沖縄・八重山諸島の人々は、江戸幕府の覇権に呑み込まれ、太平洋戦争で人々も自然環境も破壊された。さらに、近世の薩摩藩の琉球侵攻･検地実施以降明治期に至るまで、八重山の人々は「人頭税」（図52）で極度に圧迫された。琉球王国からの使節は、既に足利幕府時代1403年に最初の日本訪問をしている。日本を統一し支配した秀吉は、薩摩藩の島津に琉球を領地として与えたという（梅木，2011）。この時期朝鮮出兵が重なり、琉球侵略・武力攻勢はなく実害はなかった。しかし、これは、秀吉が琉球を日本の領土と見なしていたことを示している。日本は琉球の独立を揺るがす脅威の存在だった。すでに秀吉の時代から、日本は実質的に琉球王国に覇権を及ぼし、配下に置くため圧力を加え続けたことを知って驚いた。薩摩藩への上納（附庸・人頭税）、鹿児島の「琉球仮屋」（在番親方）・那覇の「在番奉行」の設置・配置及び琉球の監視と指示、等日本と琉球の関係史（上江州，1987）には、私にとって未知のことが多かった。

人頭税は、人の頭数で賦課される税額が決められる制度だ。白保村の資料には、村の品等と人の品等がそれぞれ４種類に区分され、税率（分数）が決められた（表２）。「分数×人口」を基礎に、例えば「上」の村では、人頭税＝「16×人口」＋「14×人口」＋「12×人口」＋「10×人口」と

表２ 白保村人頭税の税率（分数）と村の品等（1837年）

村（品等）→ 人（分数）↓	上	中	下	下々
上（21～40歳）	16	14	12	10
中（41～45歳）	14	12	10	8
下（46～50歳）	12	10	8	6
下々（15～20歳）	10	8	6	4

注１ 得能壽美 2009 古文書に見える白保村 白保村ゆらていく憲章推進委員会 より
注２ 男女ともに適用された.

なる。分数は、各品目ごとに決められ、課税品目には「本米」、「諸出米」、「白上布（女性のみ）」、「白下布」、「牛馬口銭」などがあった。人頭税は、古琉球王国の頃（薩摩支配以前）からあったといわれている（八重山人頭税廃止百年記念事業期成会，2003）。

「琉球」王国は、明治初期（1867）まで存続していたのであるが、どれだけの人が日本によるこの時期（17・18世紀）の琉球支配を理解しているのであろうか。中等教育の日本史で琉球・沖縄の歴史はどのように扱われ、教えられているのか、興味深い。近世から現代に至るまで琉球・沖縄の歴史・文化は、日本の覇権の拡大を抜きには考えられない。八重山諸島と「台湾」の人々との関わりも、中学・高校の授業で聞いた記憶さえない。日清戦争後、台湾が日本の領土とされ、八重山諸島との間に国境線はなくなった。台湾が日本の領土化され、台湾総督府が置かれたこと、それは日本の台湾侵略が牡丹社事件・霧社事件にまで遡ることなどは最近になり理解したが（坂西，2015）、沖縄・八重山諸島と台湾との関わりや「台湾人」の八重山諸島への移住・八重山の人々の「台湾への疎開」などは、想像さえしたことがなかった。日中間に尖閣諸島の領有権問題が発生して以来、「有事の安全保障」、「集団的自衛権」、「国民保護法」、「憲法改正」等々、「国の安全保障」、「有事」に関わらせた「軍備」・「防衛」の整備の必要性が強調されている。これらの問題は、近世・現代を通じた日本の歴史、「覇権」、「領土」、「戦争」と切り離して考えることはできない。「憲法改正」も視野に入れた国民にとって深刻で重大な問題が、今国会で審議されている。未来を見据えて日本の近現代史をしっかり学び、来し方を振り返らなければならい時期である。

沖縄・八重山諸島は、歴史が複雑に入り組み、文化も社会制度・慣行も日本とは質的に大きく異なる。中国と日本の狭間でかろうじて琉球王国は、国の形を維持してきた。琉球列島の歴史を知って初めて、島々の現実が見えてくる。「隣り合う集落が反目してきた」、今なお「子どもを別の学区の学校に通わせる」、こんな話も聞いた。歴史的な背景があるという。他方で、石垣島は、新空港整備で経済的、「軍事的」に活発化し、本島、内地との結びつきも強くなり、島は新たな時期を迎えている。移住者と地元民の間に軋轢が生じているとの話も聞く。島々の現在は、新たな現代的な問題を抱えながらも、過去に連なる歴史の上にあることを再確認することが重要である。

引用文献

安里進（2004）グスク時代の始まり―琉球王国の形成―八重山博物館紀要　第12号　pp.1-22　石垣市立八重山博物館

安里肇栄（2013）おきなわ野山の花さんぽ　ボーダーインク

梅木哲人（2011）新琉球国の歴史　法政大学出版局

石垣市史編集室（1985）市民の戦時・戦後体験記録第三週―あのころのわたしは―

石垣市総務部市史編集課（2004）石垣市巡見　村々探訪　―平桴村・真栄里村の移り変わり―　Vol.8　石垣市

石垣市総務部市史編集課（2011）石垣島の風景と歴史（周遊の旅・東回り編）石垣市

石垣市八重山博物館（2010）偉大な旅―新人の拡散と八重山―白保竿根田原の人骨は何を語るか

いわて純情米需要拡大推進協議会（2015）かけはしはこんなお米です　希望いわて（http://www.iwate-kome.jp/story/special.html）

NHK　2014年09月11日　時論公論「尖閣諸島“国有化”２年　やまぬ中国船の領海侵入」（http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/197101.html）

大城将保（2005）沖縄戦の概要と諸問題　八重山博物館紀要　第13号　pp.26-68　石垣市立八重山博物館

太田静夫（2014）八重山の戦争（復刻版）南山舎

沖縄県公文書館　2008年４月１日　島津氏の琉球侵攻（1609年）（http://www.archives.pref.oki nawa.jp/publication/2014/03/post-168.html）
沖縄県立博物館・美術館（2007）博物館展示ガイド　沖縄県立博物館・美術館
沖縄タイムス　2014年10月27日　石垣に新造巡視船２隻　尖閣警備強化（http://www.asahi.com/articles/ASGBV645GGBVUEHF008.html）
上江州敏夫（1987）御仮屋守日記　沖縄県立博物館紀要　第13号　①～⑭
コトバンク（2014a）先島諸島　ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典の解説，（https://kotobank.jp/word/%E5%85%88%E5%B3%B6%E8%AB%B8%E5%B3%B6-68622）
コトバンク（2014ｂ）南西諸島　ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典の解説（https://kotobank.jp/word/%E5%8D%97%E8%A5%BF%E8%AB%B8%E5%B3%B6-108845）
コトバンク（2014c）按司　ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典の解説，（https://kotobank.jp/word/%E6%8C%89%E5%8F%B8-25147）
人民日報社　2013年５月13日　「人民網日本語版」　沖縄メディア：日本が武力で沖縄を併呑したのは事実（http://j.people.com.cn/94474/8241932.html）
第七管区海上保安本部　2014年10月８日　尖閣専従体制　巡視船「たけとみ」「なぐら」就役　海上保安新聞（2014年10月２日号）
高野洋志（1992）沖縄の御嶽の信仰と女性の地位　岡山理科大学紀要．B，人文・社会科学，28, pp.121-131. 1992
田里修（2005）土地整理事業と謝花登　八重山博物館紀要，第13号，1-25, 石垣市立八重山博物館
都司嘉宣（2012a）津波　NHKそなえる防災　第１回　東日本大震災の津波を考察する（http://www.nhk.or.jp/sonae/column/20120306.html）
都司嘉宣（2012b）津波　NHKそなえる防災　第２回　過去の巨大津波で高所に移転した集落に学ぶ（http://www.nhk.or.jp /sonae/column/20120813.html）
都司嘉宣（2012c）津波　NHKそなえる防災　第３回　大阪を襲った歴史津波（http://www.nhk.or.jp/sonae/column/20120306.html）
豊見山和行（2012）近世琉球の政治構造について―言上写・僉議・規模帳等を中心に―/関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）
（http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/6267/1/4-TOMIYAMA%20Kazuyuki.pdf）
内閣府（2014）子ども・若者支援地域協議会の設置・運営モデル事業　平成25年度報告書　石垣市（PDF版）（http://www8.cao.go.jp/youth/model/model.html）
中田龍介（2004）八重山歴史読本　南山舎
人魚の里・星野（2014）開拓移民の歴史　石垣市・星野（http://ningyonosato.isigaki.info/about-hoshino/history/rekishi2.htm）
ネットワーク朝鮮通信使展（1994）秀吉の朝鮮侵略は「人さらい戦争」江戸時代に隣の国から来た朝鮮通信使
南風原英育（2012）マラリア撲滅への挑戦者たち　南山舎
波照間永吉（1988）八重山の御嶽信仰習俗覚書　沖縄県立芸術大学付属研究所紀要1, 3-25, p.12
坂西友秀（2006）故郷忘じ難く候―司馬遼太郎を読んで　児童心理　金子書房　NO. 343, 39-43
坂西友秀（1990a）オキナワへの旅　語るに語れない無残さ　東京地連　教職員院生ニュース　第７号　p.5　全国大学生活協同組合連合会・東京地方連合会・教職員院生委員会
坂西友秀　（1990b）　第三回平和ゼミナール　沖縄への旅　報告（第４回）　座間味戦の証言①　ALPHA（埼玉大学生活協同組合）　Vol.4　NO.21　p.9
坂西友秀　（1990c）　第三回平和ゼミナール　沖縄への旅　報告（第５回）　座間味戦の証言②　ALPHA（埼玉大学生活協同組合）　Vol.4　NO.22　pp.8-9
坂西友秀（2015）「教育の心理學」に関する研究と二つの世界大戦（I）―戦時における臺灣・中國・フラ

ンスと日本の関わりを例に―埼玉大学紀要教育学部　64（1）, 7-22
福田晋（2011）地域に密着した「石垣牛」のブランド化戦略　月報「畜産の情報」 独立行政法人　農畜産業振興機構（261）, 53-61（http://www.alic.go.jp/）
フジテレビ系（FNN）2014年８月15日　朝日新聞「慰安婦」記事取り消し　前代未聞の事態に波紋広がる（http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/fnn?a=20140815-00000720-fnn-soci）
本田成親（1999）ある沖縄の想い出（4）琉球侵略と初代在番奉行　南勢出版（http://www. nansei-shuppan. com/wp/honda/past-aic/2112/）
松田良孝（2004）八重山の台湾人　南山舎
南ぬ島　石垣空港　PAINUSHIMA ISHIGAKI AIRPORT（2014）八重山諸島とは？（http://www.ishigaki-airport.co.jp/yaeyama.html）
八重山人頭税廃止百年記念事業期成会（2003）人頭税廃止百年記念誌　あさぱな　南山舎
八重山日報　2014年10月27日　尖閣領海警備を専従体制へ　巡視船２隻の就役披露式（http://www.yaeyama-nippo.com/）
八重山平和祈念館（2008）戦時中の八重山地域のマラリア発生と死亡者状況
八重山毎日新聞　2014年９月３日　明石エイサー上―あの時あの頃
読売新聞　2014年09月27日　尖閣警備の巡視船２隻、下関の造船所で完成（http://www.yomiuri.co.jp/kyushu/news/20140927-OYS1T50030.html）
琉球新報　2013年５月12日　社説　人民日報論文　歴史の恣意的な曲解だ（http://ryukyushim po.jp/news/storyid-206462-storytopic-11.html）
琉球新報　2014年10月４日　ひめゆり資料館、元学徒隊の館内講話を来年３月終了へ（http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-232555-storytopic-145.html）
琉球新報　2014年12月12日　埋葬人骨　国内最古級か

（2015年３月26日提出）
（2015年６月８日受理）

Research on the historical change of Ishigaki Island, and the activities of youth, which enable to inherit and reproduce the traditional Ryukyu culture

BANZAI, Tomohide
Educational Psychology Course, Faculty of Education

Abstract

Ishigaki Island is located in Okinawa prefecture. A few decades ago, Okinawa prefecture was independent country from Japan as Ryukyu Kingdom. Ryukyu was established in the fifteenth century. The emperor of Ryukyu Kingdom visited the king of Ch'ing of China and took an oath to subordinate to him. China was the Suzerain of Ryukyu Kingdom. The king of Ryukyu pay a tribute to the Edo Shogun, Ieyasu TOUGAWA, too. TOUGAWA Shogun (General TOKUGAWA) forced Satsuma feudal clan, feudal lord Shimazu, to attack the Ryukyu kingdom, and to force obedience to Tokugawa Shogun. This is why Ryukyu king took a long journey to Edo as a ceremonial tribute paid to the Tokugawa court. The Sino-Japanese War (1894-1895) changed the fate of Ryukyu conclusively. After the war, Japan reigned the Ryukyu kingdom. Japanese government in Meiji era incorporated the Ryukyu kingdom into Japanese country, which was newly called Okinawa prefecture. In nineteenth century, Japanese Army invaded the northern part of Asia, and expanded the Japanese colonies. In the middle of the nineteenth century, Japanese army power were declined, and defeated everywhere in the whole area of East Asia. Allied force, especially American troops concentrated their attack to the main land of Japan. Japanese government and Army had no equipment to protect the main land against the Allies. Okinawa was the first battle field, and ultimate most important protect wall for the government to keep time for defending Japanese mainland. Unconditional surrender of Japan, Okinawa had been conquered by Allies, America, till 1972. Japanese government realized the return of Okinawa prefecture to Japan. After the World War II, people of the islands and demobilization soldier suffered economic distress and difficulty of everyday life. Development of the "Yaeyama Islands" and pioneer emigrants began at that time. In spite of destruction by the war, traditional culture of Ryukyu are now inherited, succeeded and enriched by the youth. Though the life of the youth in islands aren't so easy, they enjoy their everyday life and make efforts to create attractive activities. Now, the problem of the territory of Senkaku Islnds has been occurred between Japan and China. It is inevitable for us to know the historical processes profoundly, if we want to understand deeply the local reality, today.

Keyword: Ryukyu Kingdom, "OTAKE" Belief, Ryukyu Disposal, Emigrants, Traditional Culture, Youth Activities, territory problem between Japan and China